

会三五

広島工業大学 建築学科 同窓会
第8号 昭和56年版



広告もくじ	2
広島工業大学の歩み	3
学生時代の思い出	11
三筋川河畔	21
EE諸国住宅地事情視察 (生田文雄)	26
アブダビ体験記 (須賀良二)	28
アメリカ生活奮戦記	
ワシントン大学での一年間 (西川加弥)	29
ゼミナール紹介	37
第6回五三会コンペ入選発表	38
第7回五三会コンペ作品募集	40
建築学科新3号館案内	41
曾根田彰教授退職記念講演	44
昭和55年度卒業予定者就職内定者一覧表	51
第8回総会のお知らせ	53
昭和54年度決算報告, 昭和55年度予算報告	54
役員の変遷	55
昭和55年度分科会役員名簿	55
五三会活動報告	56
会員へのお知らせ	57

「広島工業大学の歩み」

広島工業大学の開学から今日までの歩みを

年間の工大の主な出来事、卒業生の数、教職員の数、その年に竣工した建物の規模、授業料、下宿代、食事代等に、年間の主なニュースを折り混せて、追かけてみたいと思う。

昭和三十六年

三月、文部省校大第五二号 広島工業短期大学（電子工学科）設置認定。

五月 広島工業短期大学第一回入学式（電子一〇七名）

○竣工した建物

四月 一一号館、RC造、四階建、延面積、一、八八三・五六㎡（電子）

十月 一三号館、十四号館、RC造、平屋、延床面積、一、〇二八・六八㎡（電気）

○年間の日本の主なニュース

四月 日米関税交渉妥結

六月 防衛2法改正案成立

六月 農業基本法公布

八月 大阪釜ヶ崎で、集団暴力

九月 台風一八号が近畿地方に

猛威、死者二〇二人

一〇月 「国際收支改善対策」を閣議決定。

一二月 旧軍人、右翼のクーデター計画発覚 三無事件

昭和三十七年

三月

文部省校大第二三三二号、電気科増設認可。

四月 広島工業短期大学第二回入学式

○年間の日本の主なニュース

一月 ガリオア・エロア返済協定調印

三月 東京でエカフェ総合開く。

三月 東京都、流感で一、二三八校全休。

五月 最高裁、八海事件再上告審で差戻し判決。

七月 第六回参議院選挙。

八月 堀江謙一が小型ヨットで、大平法横断に成功。

九月 原子力研究所の国産一号炉点火。

一〇月 二三〇品目自由化。

昭和三十八年

一月 文部省校大第一七号、

広島工業大学設置認可

（電子工学科定員五〇名）

電気工学科定員五〇名

三月 広島工業短期大学第一回卒業式）電子一〇三名

四月 広島工業大学開学、電子工学科 電気工学科開設。

広島工業大学第一回入学式（電子一五九名、電気一五〇名）

広島工業短期大学より、電子五四名、電気三六名編入許可。

○教職員の数

教授四名。助教授一名

教務職員三名。事務職員九名。

○竣工した建物

八月 一〇五号館、RC造、五階建、延床面積、二、七九二・三四㎡（一般講義）

○授業料

年間 六八、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三、四・五畳

一、五〇〇～二、〇〇〇円

六畳

二、〇〇〇～三、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食 五、〇〇〇円

○年間の日本の主なニュース

二月 日ソ貿易協定調印

三月 東京台東区で幼児誘か

いされる。（吉展ちゃん事件）

四月 第五回統一地方選挙。

五月 F一〇五ジェット戦闘機、沖縄より板付に配属。

八月 第九回原水禁大会、分裂。

十一月 横須賀線鶴見で二重衝突事故、死者一六一名。

十二月 三池三川鉱でガス爆発 四五八人死亡。

昭和三十九年

一月 文部省校第二四号、機械工
学科(定員八〇名)増設認
可。

可。

三月 広島工業短期大学第二回卒
業式(電子、五一。電気
二八名)

〇教職員の数
教授一七名。助教授七名。
講師一八名。助手五名。教
務職員五名。事務職員一五
名。

〇竣工した建物

九月 五号館、RC造 五階建
延床面積 二、〇八七・〇
五 m^2 (一般講義室)

〇授業料

年間 九三、〇〇〇円
〇下宿代(一ヶ月分)
三、四・五疊
一、五〇〇〜二、〇〇〇円
六疊
二、〇〇〇〜三、〇〇〇円

〇食事代(一ヶ月分)

朝夕二食 五、一〇〇円

年間の日本の主なニュース

四月 国際通貨基金八条国に移行。

四月 経済協力開発機構(OECD)
D)に加盟

四月 第一回生存者叙勲発表。

六月 三菱重工設立。

六月 新潟地震 死者二六人。

六月 東海道新幹線開業。

一〇月 オリンピック東京大会開く。

一〇月 池田内閣総辞職。佐藤榮作
内閣成立。

一〇月 公明党結成大会。

昭和四〇年

一月 文部省校大第五四号、土木
工学科(定員五〇名)、建
築学科(定員八〇名)、増
設認可。

三月 文部省校大第二一一号、広
島工業短期大学廃止。

四月 土木工学科、建築学科開設。

一二月 文部省校大第一七〇の五二
号、経営工学科(定員八十
名)、増設認可。

〇教職員の数
教授三〇名。助教授一一名。
講師二三名。教務職員四名。
技術職員一名。事務職員二

〇名。

〇竣工した建物

一〇月 ラグビー場、野球場開設。

一〇月 四号館、RC造 六階建、
延床面積 三、〇〇五・七
七 m^2 (土木、経営)

〇授業料
年間 一一五、〇〇〇円

〇下宿代(一ヶ月分)
三、四・五疊
一、五〇〇〜二、〇〇〇円

六疊
二、〇〇〇〜三、〇〇〇円

〇食事代(一ヶ月分)
朝夕二食 五、一〇〇円

年間の日本の主なニュース
一月 ILO調査団来日。

二月 日韓基本条約仮調印。

三月 愛知県犬山市に「明治村」
開く。

三月 農地報償法公布。

六月 第七回参議院選挙。

七月 長野県松代町付近に地震
(以後四二年にかけて郡発
地震)

一〇月 国勢調査実施(総人口九八
二七万四九六一人)

一〇月 朝永振一郎、ノーベル物理
学賞受賞。

昭和四十一年

三月 広島工業大学第一回卒業式。

四月 経営工学科開設、工学部六
学科完成

〇卒業者の数
電子 四八名
電気 三二名

〇教職員の数
教授三〇名。助教授一四名。
講師二四名。助手一一名。
教務職員五名。技術職員五
名。事務職員三二名。

〇竣工した建物
三月 六号館、RC造、平屋。延
床面積四七七・六四 m^2 (機
械)

三月 八号館、RC造、五階建、
延床面積 二、七八九・二
〇 m^2 (機械)

三月 九号館、RC造、四階建、
延床面積 二、〇四九・四
八 m^2 (講義室、食堂、理容)

四月 一五号館、RC造、二階建
延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

四月 延床面積、五九六・四〇 m^2

(自治会)

○授業料

年間 一三五、〇〇〇円

○下宿代(一ヶ月分)

三〇四・五畳

一、五〇〇〇二、〇〇〇円

六畳

二、〇〇〇〇三、〇〇〇円

○食事代(一ヶ月分)

朝夕二食 五、一〇〇円

○年間の日本の主なニュース

一月 日ソ航空協定調印。

二月 全日空機が東京湾に墜落

(死者一三三人)

三月 カナダ航空機が、羽田空港

防潮堤に激突(死者六四人)

三月 BOAC機、富士山付近で

空中分解(死者一二十四人)

四月 公労協・交通共闘の統一ス

ト。

六月 「敬老の日」「体育の日」

新設。

十一月 アジア開発銀行設立。

昭和四二年

七月 通商産業省より電気事業法

にもとづく電気主任技術者の資格等に関する省令第一

条第一項の規定による学校の認定を受ける。認定学科、

電子工学科、電気工学科。

○卒業者の数 (一) 内は累計

○教職員の数

教授三四名。助教一五名。

講師二九名。助手二〇名。

教務職員四名。技術職員六

名。事務職員四名。

○竣工した建物

三月 三号館、RC造、地上四階

地下一階。延床面積、五、

〇七九・三四㎡(講堂、土

木、建築)

八月 一二号館、RC造、三階建。

延床面積 二八二・二四㎡

(高圧実験)

十一月 迎賓館。三月 工大山荘。

○授業料

年間 一五〇、〇〇〇円

○下宿代(一ヶ月分)

三〇四・五畳

一、五〇〇〇二、〇〇〇円

六畳

二、〇〇〇〇三、〇〇〇円

○食事代(一ヶ月分)

朝夕二食 五、一〇〇円

○年間の日本の主なニュース

三月 日ソ貿易議定書調印。

三月 日本航空が世界一周線の営業開始。

四月 都道府県知事・議員選挙(

東京都知事に美濃部亮吉当

選)

七月 防衛庁設置法・自衛隊法改正公布。

八月 公害対策基本法公布。

九月 国鉄、上越線清水トンネル開通。

十一月 日米共同声明発表(沖繩返還時期を明示せず)。

昭和四三年

四月 土木工学科卒業生に、測量

士補の資格を与えられる。

○卒業者の数 (一) 内は累計

電子 一〇〇名(二六八名)

電気 八四名(二〇五名)

機械 一二〇名

○教職員の数

教授三七名。助教一七名。

講師二九名。助手二〇名。

教務職員四名。技術職員六

名。事務職員四九名。

○竣工した建物

二月 七号館、S造、地上三階地

下一階建、延床面積、八一

二・八六㎡(機械)

三月 本館、一号館、RC造、七

階建、延床面積、七、八九

五・七〇㎡(管理部門、建

築、電子計算機)

三月 二号館、RC造、二階建、

延床面積 一四二・四二㎡

○授業料

(体育)

年間 一六四、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三〇四・五畳

一、五〇〇〇二、〇〇〇円

六畳

二、〇〇〇〇三、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕 二食 五、一〇〇円

○年間の日本の主なニュース

一月 原子力空母、エンターブラ

イズ 佐世保入港。

二月 金婚老事件

六月 小笠原諸島、正式に日本に

復帰。

七月 第八回参議院選挙。

七月 文部省が新字習指導要領を

告示。

一〇月 川端康成がノーベル文学賞

受賞。

一〇月 明治一〇〇年記念式典。

一二月 府中市で銀行の現金輸送車

の三億円奪われる。

昭和四四年

○卒業者の数（一）内は累計

電子 九八名（三六二名）

電気 八八名（二九三名）

機械 一九六名（三一六名）

土木 六一名

建築 八七名

○教職員の数

教授三六名。助教授一九名。

講師三〇名。助手二五名。教

務職員三名。技術職員六名。

事務職員六六名。

○竣工した建物

三月 新一五号館、RC造、四階

建、延床面積 五八四・九

一^m（自治会）

五月 一八号館、RC造 二階建、

延床面積 六五六・六七^m

（プール）

九月 守衛室、S造、平屋、延床

面積 四五・八一^m

○授業料

年間 一七三、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三〇四・五畳

一、五〇〇〇二、〇〇〇円

六畳

二、〇〇〇〇三、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕 二食 五、一〇〇円

○年間の日本の主なニュース

三月 衆議院運輸委、国鉄運賃値

上げを強行採決。

五月 東名高速道全線開通。

七月 参院本会議、防衛二法を強

行採決。

一〇月 日米航空交渉妥結。

一〇月 国際反戦デーに反日共系学

生（の）ゲリラ、各地で続発。

一二月 佐藤ニクソン共同声明（沖

繩施政権返還）

一二月 衆院解散、師走選挙。

昭和四五年

○卒業者の数（一）内は累計

電子 一三七名（四九九名）

電気 一三七名（四三〇名）

機械 二四六名（五六二名）

土木 二二一名（一八二名）

建築 二〇〇名（二八七名）

経営 一〇二名

○教職員の数

教授三四名。助教授二二名

講師三一名。助手三五名。技

術職員七名。事務職員七三名

○竣工した建物

六月 新一四号館、RC造、四階

建、延床面積 一、一二一

・六〇^m（電気）

六月 新五号館、RC造、五階建

延床面積 七二〇・九〇^m

（機械研究室）

六月 一七号館、RC造、三階建

延床面積 三、三一九・〇

六^m（武蔵館）

○授業料

年間 一七三、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三畳 二〇〇〇〇三、〇〇〇円

四・五畳 三、〇〇〇〇五、〇〇〇円

六畳 四、五〇〇〇六、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕 二食 六、五〇〇〇八、五〇〇円

○年間の日本の主なニュース

二月 東大宇宙航空研、ラムダ4

S型五号機を発射、初の人

工衛星に成功。

三月 日本万国博開く（⁹）¹³

三月 日航機「よど号」赤軍派学

生に乗取られる。

四月 沖繩デー集会在各地で開か

れ、計約二〇万人が参加。

一〇月 山陽新幹線六甲トンネル貫

通式。

一二月 三島由紀夫ら割腹自殺。

昭和四六年

○卒業者の数（一）内は累計

電子 一二七名（六二六名）

電気 一二八名（五五八名）

機械 二二二名（七七四名）

土木 一五五名（三三七名）

建築 二二八名（五一五名）

経営 一〇二名（二〇四名）

○教職員の数

教授三四名。助教授二三名。

講師三九名。助手三一名。技

術職員四名。事務職員七五名

○竣工した建物

九月 新八号館、RC造、平屋、

延床面積、七〇・五〇^m

（機械）

一二月 図書館、RC造、四階建、

延床面積 四、一八〇・九

四^m

○授業料

年間 一七三、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三疊 二、五〇〇〇三、〇〇〇円

四・五疊

三、〇〇〇〇五、〇〇〇円

六疊

四、五〇〇〇六、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食

六、五〇〇〇八、五〇〇円

○年間の日本の主なニュース

四月 第七回統一地方選挙

六月 沖繩返還協定、東京、ワシントンで同時調印。

六月 第九回参議院選挙

七月 全日空機と自衛隊機が岩手県上空で接触、墜落、一六二人死亡。

九月 天皇、皇后ご訪欧。

一〇月 第一観業銀行発足。

一〇月 沖繩返還協定強行採決に対し、全国八八三ヶ所で、行

議行動。

昭和四七年

○卒業者の数（ ）内は累計

電子 一三二名（ 七八名）

電気 一二四名（ 六八二名）

機械 二四一名（ 一、〇一五名）

土木 一二三名（ 四六〇名）

建築 二二三名（ 八三八名）

経営 一二四名（ 三二八名）

○教職員の数

教授三五名。助教授二五名。

講師三七名。助手三名。

技術職員六名。事務職員八

三名

○授業料

年間 一七三、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三疊

二、五〇〇〇三、五〇〇円

四・五疊

三、八〇〇〇六、〇〇〇円

六疊

四、〇〇〇〇六、五〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食

八、〇〇〇〇一五、〇〇〇円

○年間の日本の主なニュース

二月 冬季五輪札幌大会開く。

二月 連合赤軍五人が「浅間山荘」にこもり銃撃戦。

三月 奈良県明日香村高松塚古墳内で、彩色壁画を発見。

五月 沖繩施政権返還され、沖繩県発足。

七月 田中角栄内閣発足。

九月 日中国交正常化の共同声明調印。

一〇月 国防会議で四次防正式決定。

一二月 第三三回総選挙。

昭和四八年

三月 広島工業大学開学満一〇周年を迎える。

四月 学長に前川力（広島大学教授、理学博士）を迎え、鶴

裏は鶴学園総長専任となる。

○卒業者の数

電子 一四〇名（ 八九八名）

電気 一二七名（ 八〇九名）

機械 二四八名（ 一、二六三名）

土木 一四四名（ 六〇四名）

建築 二五三名（ 九九一名）

経営 一二七名（ 四五五名）

○教職員の数

教授三四名、助教授二五名、

講師三四名、助手二七名、

技術職員五名

事務職員七二名

○授業料

年間 一七三、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三疊

二、五〇〇〇五、〇〇〇円

四・五疊

三、四〇〇〇八、五〇〇円

六疊

三、五〇〇〇八、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食

八、〇〇〇〇一八、〇〇〇円

○年間の日本の主なニュース

二月 円の変動相場制に移行

四月 春闘初のゼネスト決行

五月 自民党が衆院で六五日の会期延長を単独可決。

五月 西之島海底火山が爆発。

七月 日航ジャンボ機アムステルダム離陸直後アラブゲリラに乗取られる。

八月 金大中氏が東京のホテルから連行される。

十一月 関門橋開通。

昭和四九年

○卒業者の数（ ）内は累計

電子 八七名（ 九八五名）

電気 一二五名（ 九三四名）

機械 一九七名（ 一、四六〇名）

土木 一〇三名（ 七〇七名）

建築 一八二名（ 一、一七三名）

経営 一二九名（ 五八四名）

○教職員の数

教授三七名、助教授二三名、講師

三八名、助手二一名、技術職員六

名、事務職員七二名。

○竣工した建物

九月、新二号館、RC造 地下一

階地上三階、延床面積三、三〇〇

m²（建築・土木）

○授業料

年間 二二三、〇〇〇円

○下宿代（資料集められず、記載い

○食事代 たしません。）

○年間の日本の主なニュース

四月 春闘共闘の八一単産、交通

ゼネストに突入。

四月 日中航空協定調印

五月 国土利用計画法成立

七月 第一〇回参院選挙

七月 三木副総理、福田蔵相辞任。

八月 東京三菱重工本社で爆破事

件（死亡八、負傷二八八人）

十一月 田中首相、金脈問題をめぐ

政局收拾のため辞意。

一二月 三木内閣発足。

○授業料

年間 四三〇、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三畳

五、〇〇〇～一〇、〇〇〇円

四・五畳

八、〇〇〇～一二、〇〇〇円

六畳

一〇、〇〇〇～一五、〇〇〇円

○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食

一八、〇〇〇～二二、〇〇〇円

○年間の十大ニュース

① 東名、日本坂トンネル事故（7・11）

② 三菱銀行銃斃人質事件（1・26）

③ 東京サミット（6・27～6・28）

④ KDD密輸、乱脈拡大

⑤ 総選挙、自民敗北（10・7）

⑥ パンダ、ランラン死ぬ（8・31）

⑦ 自民抗争、大平内閣難産

⑧ 神野寺トラ騒動

⑨ 航空機疑惑

⑩ 鉄建など官公庁不正続発

昭和五五年

○卒業者の数（一）内は累計

（昭和五十五年九月現在）

電子 一一九名（一、六一九名）

電気 一一四名（一、五七七名）

機械 二〇二名（二、五四一名）

土木 一一七名（一、三九八名）

建築 一九七名（二、四一八名）

経営 一一七名（一、二二五名）

合計 一〇、七七九名

○教職員の数

教授六〇名

助教授三四名

講師二九名

助手一六名

技行職員一三名

事務職員五六名

○授業料

年間 四八〇、〇〇〇円

○下宿代（一ヶ月分）

三畳

四、〇〇〇～六、〇〇〇円

四・五畳

六、〇〇〇～一〇、〇〇〇円

六畳

七、〇〇〇～一三、〇〇〇円

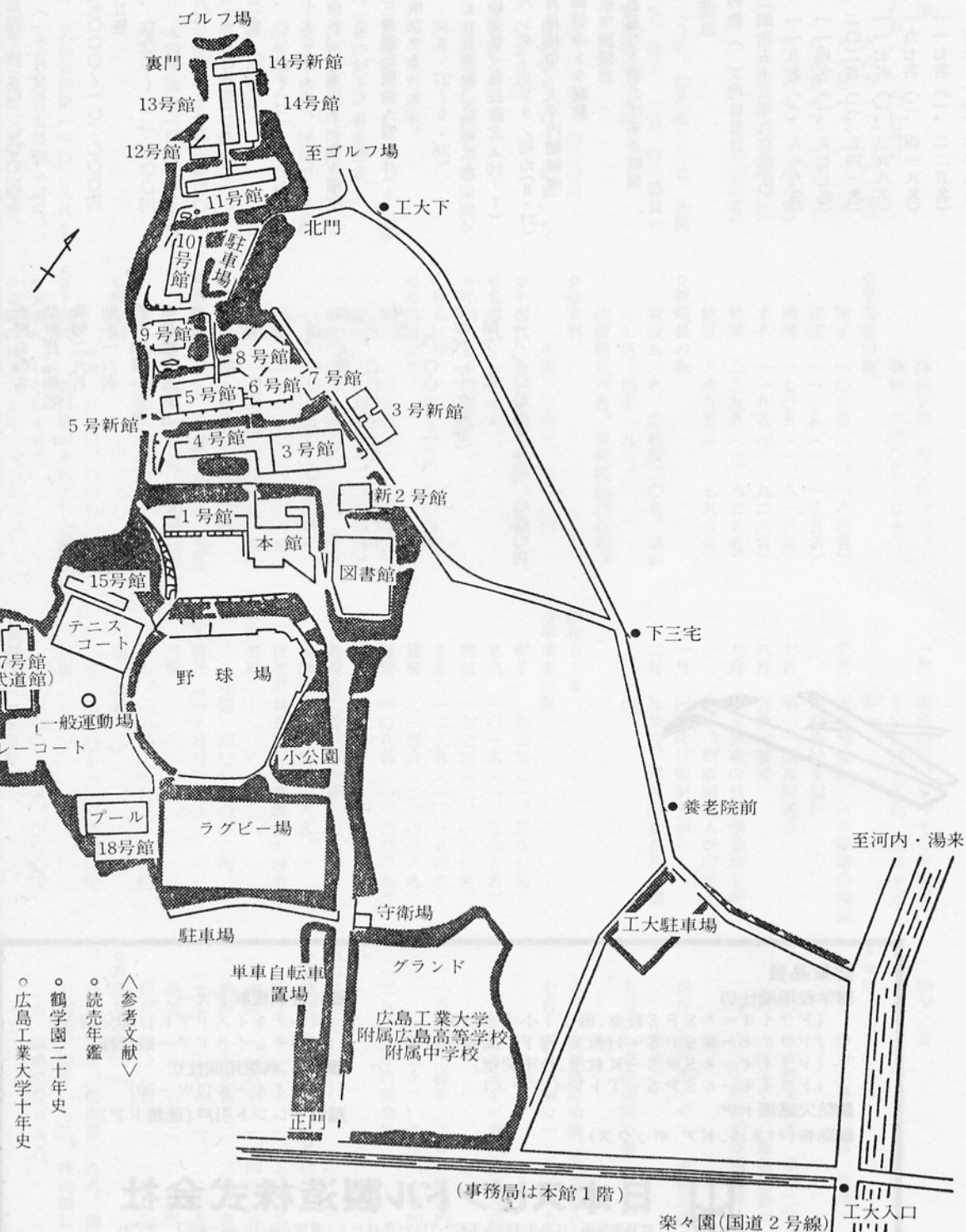
○食事代（一ヶ月分）

朝夕二食

一八、〇〇〇～二二、〇〇〇円



広島工業大学校舎配置図



学生時代の思い出話

工大時代の思い出

思い出

(日成建設勤務)
(四十五年卒) 西岡正憲

(日成建設勤務)
(四十六年卒業) 野田 力雄

私は工大を昭和四十五年の三月に卒

業した、第二回生です。学生時代は、勉強は余りせず、とかく遊びにふけたものですから、社会人になつて非常に苦労をしています。思い出といえば、

まず四年間で無事卒業できた。という事と陸上部で、中国四国学生選手権の百メートルで、四年間に二回優勝した事ぐらいです。しかし人間的な面で、高校時代からくらべてかなり丸くなった様に感じた。おかげで社会人になつてかなり楽であつて、とくをした様に思つた。これからも工大の卒業生としてはずかしくない様一生懸命がんばりたいと思います。

以上

英語、構造、一番苦手とする科目である。何度補修を受けたであろうか。自分の事とは言え試験を受けるのがいやになつたものである。

授業に慣れて来る頃には、クラブに入り、カメラ片手にブラブラした。よく単位が取れたと思つている。又、年に一度の大学祭も、多くの経験がある。中でも一番思い出に残っているのは、流行のミニスカートを着き町中を行列し、大風邪を引いた事である。今ではとても出来ない事である。

四十二年入学、四十六年卒業の一人である。入学して一年余りは、大学生活に慣れるのが精一杯である。一年の内大半は休み、時間をもてあます割には勉強がはかどらない。義務教育でない大学はどのようなものなる。社会での

経歴、本人のための勉強、等々、いろいろ考えられるだからという解ではないが、アルバイトに熱中した。それも建築とは別世界の事ばかりである。しかしその経験が社会に出て十年目になる現在でも大いに役立っている。

いろいろ思い出はあるが、学生時代にこれをしたと言えるものがない。中途半端でなく、勉強、クラブ他、何か学生時代としたといえる様な毎日を通した方が良いのではないだろうか。

今の感想

(日成建設株)
(昭和四十七年卒業)
八畝田 正昭

社会人になつて、はや9年をすぎ、30才の声を後に、自分自身の仕事を振り返つて見ると、何をしたのだろうと、考えこんでしまう。

入社して、3、4年は、現場の仕事もあり解らず、但夢中で、自分の意志ではなく、現場の流れに自分の身をまかせ、流されてしまった気がする。その後、現場の流れが少しずつ解つて来るにつれ、現場の難しさが身にしみ

る様になった。その現場の流れは、人と人との和、チームワークから生まれる。その和の中心が現場所長であり、その所長を助けるのが職員であり、又協力業者であると。しかしそのチームワークを保つには、一つの大きな条件がある。それは、元請、下請の相互の利害関係である。

但、一個人として仕事をするのであれば、一つの工事が、早く、美しく完成すれば、目的は達成される。しかし会社である以上、もうけないと、いくらいい仕事にしても、その価値は、半減する。そこに現場の難しさ、又現場のチームワークの難しさがある様に思う。

この度、梅林の県営アパートの現場で仕事をする事になった。県でも始めてのセットバック式のアパートで注目されているが、まず職員内のチームワークを大切に全員でがんばりたいと思う。近くを通られた方は、ぜひ現場によつて下さい。

おわり

学生時代の思い出

(日成建設勤務)
(47年度卒)

中西 真悟

学生時代の思い出

(南海建設勤務)
(48年度卒)

尾上 光紀

昭和四十三年、広島工業大学に入学

して、四年間の思い出といえば、毎年ある試験の事を思い出します。いつも仲の良い友達の下宿に、一週間位、ころがりこんで、試験前日まで、遊びはうけて、一夜づつで試験に向う、こんな事を、毎年続けていたわけですが、

学生時代の思い出ということなのですが、私は今にしてみると、学生時代何を学んだのか疑問で一杯なのです。というのも、社会に出て学生時代に受けた講義内容と実際が、あまりにもか

け離れていて役に立たなかったからでしょう。

今思うと、いい思い出というより、良い経験をしたなと思います。というのは、友達の下宿は、一種の寮の様なかんじで、工大の先輩は、もちろん、他の大学、女子大も含めてですが、十二

大学というのは、教えてもらうところではなく、自ら学ぶところであると自分では考えていたものの、学生に対して教授の数の少なさ、大教室での通りいっぺんの授業内容、おそらく、大学に期待と希望を抱いてきた多くの

達か？

の大学、女子大も含めてですが、十二

大学に期待と希望を抱いてきた多くの達か？

の大学、女子大も含めてですが、十二

大学に期待と希望を抱いてきた多くの達か？

位合格してののではないのでしょうか。

在学生在が私の様に、卒業後悔いる様な事がなければ良いと思いますが・・・皆さんはどうお考えでしょうか？この文章が活字になるかどうか疑問ですが・・・。

「大学時代の思い出」

(日成建設勤務)
(四十八年卒)

山下 喜佐夫

宝石箱の中に、一通の古い封筒があった。先月家を新築し、一ヶ月たった今でも片付いていない。部屋の片スミにおいてあるそれからできたものだ。学生時代に女房にあてた手紙なのだ。

色々な事が思い出されてくる。二年生の時の夏、友達十人位で空積にキャンプに行った。ヤブカにさされながらカレーを食べた思い出。アルバイトで、酒を飲みながら靴のタタキ売りをしたり、氷のシロップを作ったり、鉄工所に行き手を火傷したり、そんな思い出。徹夜マージャン、朝から晩までパチンコを、長い時間待ってのボーリング、そんな思い出。

大学一年の時知り合い、卒業して一年で結婚した。内容はというと、とりとめもない事を・・・書いてあった。一週間の日付、時間を書いて、『この本はどうのこうの』、『製図を夜おそくまで書いて眠たい』等々とにかく長い手紙だった。当時のそんな行動に、はずかしさを覚え、一人、内心、ニヤニヤしながら読んだのが、数日前だった。あまり目だたぬ学生だったと思う。

卒研の時、夜おそくまで研究室に残りラーメンをすすりながらロットリングを走らした事もあった。ダンパンの券を売ったり、文化祭のはしごをした事もあった。大学時代の最後の思い出を大切にしたいという気持ちで、信州に車で一週間の旅行をした事は、いまでも大学時代の思い出の一つとして心に残っている。卒業後、中国新聞に「大学紹介」のコーナーが、掲載され、た。広島工業大学の時、『施設、設備、

環境は申し分ない。ただ学生の意欲がもう少し、最近夜おそくまで電気を付ける姿が見られるようになったが・・・云々と書かれてあった。今はどうであろうか？ その切り抜きは、今でも大切に保管している。卒業して7年学生時代の4年間はあつという間に過ぎて行った。・・・・・

最近、5才女、2才男、二児のパパである。

55・11・15

懐石

(四十八年卒) 栗栖 直久

古き良き時代を語るには、先輩諸氏を差し置き、はなはだ恐縮致しております。

折りしも、私自身今年満30才を迎え、人生の一節とし、我を顧みる機会として、文頭で述べた内容からは掛離れた文面かも知れませんが、粗筆ながら、古き良き時代々として私なりの感想を述べたいと思います。

学生時分の私は、今思えば中途半ばな生活を送っていた事に、今更ながら口惜しい思いでとなっております。し

かしながら、この学生時分に知り会った知人(クラスメート、クラブ員、サークル活動・・・)は、未だ忘れ得ぬ友人として、現在も各々の職場を確立しているにも拘らず月に一度の例会を有意義に過ごさせて頂いている。

先に述べた、中途半ば々とは、社会人として、職種の間として、その中で、体験して来た事により感受した事です。理想と現実との葛藤によつて芽え、そして認知の繰り返しにより、人間として、又一個人として気づいて抽象的なものです。知識の豊富な世界で、経験を積み重ねる事により、無意識の内に(当然、それなりの努力が必要ではあります。・・・)自己を反省する試みの中で生じて来る羞恥心だと思えます。

学生自分の私は、特に理想社会の中でしか自分を位置づけしていなかった事に思えます。しかしながら、この理想の影像を追う事は、決して無駄ではないと思う。学生にとって、最も必要な事と云えば、常に未来に向つて、向上させようとする精神が、例えば徒勞であるにしても純粹に探究する意気込み

が大切である事は云うまでもない事です。

学生とは、思想・考察力・喜怒哀・苦悩・失望・・・、を最も理想的な立場で感受し、表現しきれる唯一の時であると思います。

就職の際、大半の学生は、請負業者、設計事務所・官公庁等へと進路を定められる。この時点で、形而上的にも云えないまでも、只、漠然と、一節の区切りしか最終的には映っていない。

極端な話、学生時代の自論は、一歩社会人として旅立つこの時点で終わっている。(教育者あるいは研究者でない限り)

現実社会下で要求されているものは、有形こそ違ひはあるけど、通俗概念・慣習・個人の生活、そして、体験等が、混沌とした中で複雑な形となって自論を崩す事になってしまう。尚、あえて言うなれば、最も影響を与える事は、”個人の生活”と思つて相違ないだろう。この個人の生活を確保する為、人は、それぞれの分野にて、与えられた位置で、社会という拘束された中で生きなければならぬから。

仏教で云う、輪廻とまでもいいかないが、学生時代を理想社会と例えると、冒険・委縮・平凡といった波の繰り返しを体験していく事になるのではと私は思っています。

それゆえに、学生として与えられた”時”は、遮二無二体面を考慮する事なく、興味の枠を探究出来る自由と想像の設計の場であると思っています。

学業ばかり、研究ばかり、サークル活動ばかり、全てが一体となつて、一個人をより充実に形成させていく事が出来るのは、やはり、学生時代だったと、今更ながら、私個人の良き思い出となつております。



学生時代によせて

(日成建設勤務)
(四十九年卒)

高山 和始

今、振り返って見るに、よくもまあ、

まともに4年間で、卒業出来たと思う。

自分は、決してまじめな学生では、な

かった様だ。学問すると言う事に関し

て、と言うのはどの様な講議を受け、

どの様な先生方から教えを受けたか頭

の内にはつきりと浮んでこないのだ

る。浮んでくるのは、あの毎年三月の

試験結果発表の、大学一号館の、あの

ホールの掲示板なのである。あの掲示

板を見るためにアルバイトを、ちよつ

とぬけだし、重い足どりで長い坂道を

登り、恐る恐る、そう、あの掲示板の

前に立つ自分であつた。

”アッ、オレの学生番号がない。な

いぞ、”そう、毎年あの時期の気持と

いうやつは、今でも、決して忘れる事

の出来ない。いやな、いや今になつて

は、なつかしいというか、一種独特の

ものである。

そんな自分だから、人並以上に好き

な事をやり、良く遊んだと思う。

クラブ(サッカー部)、パチンコ、

車、マージャン……。これは、どれ

をとつても誰にも負はしない?と今で

も思っている。

結果的には、これらが現在社会にで

て(日成建設(株)勤務)非常に、対人関

係等にやくだっている。

だから今、学生時代自分にとっては、

非常に有意義な、時だった様に思う。

これからも自分を見失なわず、社会

の為に役立っている、人間であろう

と思う、このごろである。

大学を卒業して

(日成建設勤務)
(五十年度卒)

井 良治

昭和五十年四月、広工大同期3人と

共に日成建設の建築部に入社、現在は、

大久保君と2人になりました。

入社当時は、現場見習として、各現

場の見学と片付人夫として3か月間余

り新入社員数名と共に働きました。

その後、現場に配属され、先輩の補

佐として、仕事をするようになり、少

しではあるが、現場員の仕事がわかる

ようになりました。最初のうちは、今

日は何をすれば、今何をしたらよいか

がわからず、ただ、職人の手元として、

毎日が終ったような気がします。それ

が、仕事が少しづつでもわかるように

なると、職人との話し合いの場が多く

なり、感情的になることが、しばしば

あった。ある時は、職人に「若僧が、

仕事もわからんのに」と罵られ、けん

かをすることもあったが、二年三年と

働いていくうちには、職人との話し合

いもうまくなり、感情的になることが

少なくなってきた。建築と言う仕事は、

今でもかなり封建的なことが多く、た

だ単にゼネコン業者だとは、わりけれ

ないことがある。最近では、職人の数

も減り、質を言っているのは、仕事を出

来ないことがしばしばある。

建築業務は、奥が深いと言うが、六

年たつ今でさえ、難しいことが、数々

と出て来ます。その難しい条件のもと

での仕事は、肉体的にも精神的にもま

いる面もありますが、工事完了時の喜

びは、何事にも勝るものがあり、現在

までどうにかこうにか、建築の仕事に

たずさわっているのが、真実と言うと

ころでしょう。

今後、情性の六年を脱衣、意欲の十

年、二十年としたいと思います。

学生時代の思い出

(日成建設勤務)
(五十年卒)

大久保 繁博

学生時代の思い出の中で一番印象に残るのはクラブ活動ではなからうか。

社会に出て、職場、街角、飲み屋などで会って「よお、おまえか」「先輩」などと言う言葉をよく聞く、話の内容という、やはりクラブ活動の事が多い。

「あいつは、どこへいったのか」とか「何をしているのか」「あの先生はまだ何なのか」とか「あの時のコンパはおもしろかった」とか話はつきぬ。

やはりクラブ活動は教室で講義を受けるのとは違い、自分自身の中に何か印象に残る物があるから社会に出てもすぐ思い出せるのではなからうか。

自分の学生時代を振り返って見ると、あの胸膨らして登校し入学式に挑んだ事を覚えていて。式後、玄関附近で各クラブごとの入部勧誘合戦も目新しい。

自分は昔から憧れていた野球部に入部した。当時は工大は野球が強かった。広島六大学で常に一位だった。一位を毎年確保するにはそれ相当の練習が必

要だった、甘い世界ではなかった。

講義が終了後、白球が見えぬまで、毎日毎日の練習の繰り返しだった。

バッターボックスに立って、球を打ちたくても打たしてもらえず、球拾いの毎日だった。

しかし、レギュラーへのチャンスがきたのである。それは新入部員の打撃練習であった。

その頃、監督は左打者を好んでいたようで、自分は運よく目をかけてもらった。

先輩の一人が「私のユニホームをやるから頑張れよ」と言われ、一段と練習に熱が入った。

しかし、半年が過ぎようとした頃、ある練習で左ひじを痛めてしまった。

当然、練習にも身が入らず、レギュラー確保まであと一歩というところで野球を断念するに至った。わずか半年であった。今でも、学生時代を思い出した時にあの時の悔しさを思い出させる。

思い出の中にも色々あるが、さしずめ、自分の思い出は、残念無念と云った思い出であらう。

夜の停車駅

(現代計画研究所)
(五十年卒)

多治見 正則

秋雨の降りしきる中、聖堂に響いた

あの音色は、あれは、一体何だったのか。霞のようにたなびき漂う弦合奏のオーヴァートーン……。しなやかに表情豊かに、めくるめくような明晰な音重厚でありながら贅肉のない、渋く控えめでありながら鈍さのない、くつきりと鮮明で明るく、しかも柔らかなめらかな……。いくぶんウェットであったあの音色、録ったばかりのBBCモニターより再生される音色は、しかししやぎすぎだ。宝物でも手に入れたような喜びようだ。生録の後味は、きまつてこんなものだ。オーディオに足をつつこんで五年、最初は、当時としては唯一のヘッドホンジャックのついたチェーナー(ソニースT15950)にバイヤーのヘッドホン、それに似たばかりの位相差給電方式のアンテナで、もっぱらヘッドホンリスニングだったのが、とうとう趣味が高じて生録まで始めるようになり、同好の士を集めて倶楽部まで作ってしまった。ここまで熱をあげさせたのは、意外に

も、七七年七月一〇日の新宿厚生年金ホールでのカラヴェリグランドオーケストラコンサートの中のステージであったと今になって思っている。PAを駆使したパワフルで華麗な演奏の中にあって、途中で一曲だけ、楽団の弦楽器奏者(ヴァイオリンとヴィオラ)だけにによるカラヴェリ編曲の名前は忘れてしまったがクラシック曲をPAは一切使用しないアコースティックな響きで演じてくれた。これが抜群に良かった。まさに瀬川冬樹氏の霞のようにたなびき漂う弦合奏のオーヴァートーン……。そのものであった。私のサイクルと波長が一致した瞬間である。それ以来、私の脳裏には、あの曲のメロディよりも音色がこびりついて離れず、それが今日の私の音色の再生基準となっている。そのような過程の中で七九年の秋位まで、単なるリスナーであったが、ふとした事で、生録に目がむきはじめた。仕事で鈴が峰の現場にいた時にFMで聴いたキース・ジャレットの「サンバ・コンサート」の中のサッポロで、ソロピアノによるジャズの即興演奏であったが、アコースティックな響きと共に、それが菅野冲彦氏による録音であるということがわかるまでに時間はかからなかった。規模

からして、ソロあるいは小編成の室内楽程度ならば、録音技術の方はさておいて、持てるのではないかと思ひ、試みに八十年の四月、知人の発表会に、デッキ、マイク、スタンドを持ち込んだ。会場のアコースティックに振り回された結果になったが、それでも生録をしたんだという喜びは、録音の出来をはるかに上廻っていた。数えて四回目、つい先達での世界平和記念聖堂での生録は、八十点位になったと思つてゐる。私の生録の目標には、菅野冲彦氏がいる。話ついでに、晴海で開かれたオーディオエアを見る機会に恵まれたので行つてみると、幸いにも、瀬川冬樹氏に会う事ができた。会つたといつても話をした訳ではないので見たと言つた方が適切かも知れない。KEFのブースでのデモの講師として招かれていたのである。内容は、氏の持ちよつたレコードをかけながら、KEFの古いモデルから最新のモデルまでをそのSPにあつたレコードでもつて順次紹介して行くというものであつた。氏の書いた論評や記事等に結構なじんでいる私にとって、氏の一挙手一投足まで、興味の対象となつたが、私以上に無造作なレコードのジャケットよりの取り出し方、それに反して、繊細

も言える程のメカニズムの操作、ある程度予想はしていたものの、現にそれを見てしまうと、親近感さえわいてくる。私のオーディオの鏡は瀬川冬樹氏である。ここで蛇足の禁をあえて犯すならば、建築の同窓会誌を十分承知でオーディオの事をいけしやあしやあと書いたのは、それにかこつけて、現在の学生について一言いたかつたからである。学生諸君、君らは、目標とすべき、あるいは鏡とすべき建築関係者をみつめてはゐるか。斉木崇人氏を知つてゐるか、村上徹氏を知つてゐるか。かつて私は、大学同窓会一〇周年記念誌に、このままだと面識のある同窓生は一〇以下になるのは必至であるという事を警告したが、その当時は別段気にもしていなかつた学科の同窓会すら、大学同窓会と言うに及ばず、現在では大半の人がコンマ以下であると思われる。

私個人に限れば、学科の同窓会は、まだ辛うじて一〇台を保っているが、来年度以降は、それなりに努力はしているもののわからない。保っている理由は、在学中に同じゼミにいた後輩、及び卒業後、ゼミの先生による後輩の紹介（これは現在も続いているテニスを通じての紹介である）、それから、特殊な分野だが、役所に奉公している友人のTを介しての先輩、後輩の紹介。Tはその分野では長けているので、当分は就職が続く限りプラスに働くだろう。このTは我が生録倶楽部の会員で唯一のSE専門である。ざつとこれが何とか一〇台を保っている理由だが、現在の学生に関しては悲観的だ。何も手をこまねいている訳ではなく、求めがあれば応じる体制にあるのだが、その求めが一向にない。こちら側からも例えばアルバイトという形で手を差しのべても何の音沙汰もない。昔は違つていた。少なくとも我々の時代までは、そんな事はなかつた。現在の学生の中に、果敢にも我々に挑んでくる者は一人でもいるだろうか。八一年三月に卒業する一三期の学生までを含めて、七五年三月卒業の我々七期が丁度中間になるので折り返してみると、その差の大きい事に驚ろく。瀬川氏の言う国産カメラの随落と同じようだ。昭和ヒト桁の中頃、クレデンサー、ライカ、家一軒、この三つは同じくらいの値段であつた、のだそう。クレデンサーは当時世界最高といわれた大型の蓄音器。ライカは言うまでもなく三五ミリカメラの元祖。それが、四〜五人の家族が楽に住める土地つきの家一軒と同

じくらしいの価格だったという。★今、カナダ製ライカR4MOTで五〇万円位、蓄音器は、ステレオサウンド五三号に載つたJBL4343WXのマークレビンソン等によるバイアンプ駆動（しかも各機器片チャンネル使用のモノラル構成）で一〇〇五万四千円。★当時の背景を考えると、オーディオもカメラも、実に安くなつた。しかしほんとうに、当時と同じ性能だろうか。バカを言うな、当時よりよほど高性能になつてゐるさ、と答えがはねかえつてくるだろう。が、ちよつと待つてくれ、ほんとうに当時以上なのか。もう一度ライカに話を戻そう。一九三〇年代に作られたライカの見事さは、いまでも語り草になつてゐる。

大切に保存された製品や、きんざん、使い古されながら生き残つてゐる製品から、そのすばらしさを読みとることが出来る。黒塗りのボディの塗装は、さながら漆の滑らかさで、そこに特殊な工法で純銀の文字が象嵌されている。入念な塗装が剥げ落ちて真鍮の地が露出し、ニッケル・メッキしたノブのローレットの山がスリ切れるまで使つても、むしろそのあたりから一層調子が出てくるといわれるくらい、メカニズムの耐久力にも定評があつた。そうい

うライカからみると、いまのライカの材質も工作も仕上げも、手抜き工事の駄作だと悪態をつきたくなるくらい墮落している。私は何かのショーで、

その三十年代のライカを見ただけで、むろん触れたことさえ一度もないのでコメントを加える資格すらないのだが、そこは鏡の瀬川氏だけに、多分、私が手にしたとしても、氏はど表現はできないにしても、同様の感を持ったと思う。氏はその悪くなったライカさえ、国産の高級カメラよりカタログには現われない微妙な部分の性能に至るまで、控え目に表現してもやはりひとランク違う、と言わざるをえないと言っている（昭和五十年十一月）のだが、このカメラを学生に置きかえてみる事ができないだろうか。むろん我々の時代に比べて、現在の学生は、改善されたカリキュラムにより、比較にならぬほど知識も技術も習得しているはずであるが、その改善された知識や技術が、最近のカメラにも似て、素人にも難なく扱える、いわゆるバカチョン式なメカニズムの改善という所に留まっているのではないか、そんな気がしてしょうがないのである。腐っても鯛ならぬ、

墮落してもライカであってほしいと願うのは私だけであろうか。話がオーディオからカメラへときたが、最後は再びオーディオで締めくくりたい。オーディオの魅力の中には、言うまでもなく《音楽》とそれを鳴らす《メカニズム》と、そこから出る《音》という

三つの要素があるが、ことにメカニズム自体の持つ魅力に溺れるという楽しみは、オーディオ道楽の中でも相当に大きな比重を占めている。※この《音楽》を《センス》、《メカニズム》を《表現能力、表現手段》、《音》を《建物》と置きかえると、正に建築家あるいはそれに係わる人々等による建物として出来上るまでの過程を表現できるのであるが、係わりからみれば、同じく大きな比重を占めるのは、製図、施工、監理といった《表現能力、表現手段》と思う。その質を左右する《音楽》、《センス》は一朝一夕にして出来上るものではないが、※生まれつきからまずい水を飲んでいれば、水を味わう能力がまったく開発されずに一生を終ることになる。人間の潜在能力は、何かに触発され開発され磨かれなくては駄目なものであるらしい※とい

う言葉を引き合いに出すまでもなく、環境からして、まずい水も同然の今日の日本にあつて、触発し、開発し、磨かせる「何か」に出会うなり見つけるなりして、その千載一遇のチャンスをも

自分の方から進んで自分のものに出来るかどうか、「何か」が向こうからやってくるのなら尚結構、それが《センス》を身につけるかどうかの別れ目だと思ふのだが……。生録をしている私にとって、不運にも今まで《音楽》に恵まれていなかったが、少なくとも生演奏に出来るだけ多く接して、回数をつんで、BBCモニターより《音楽》が流れてくるようにするのが夢である。私の生録は今始まったばかりである。聖堂に響いたあの音色は、あれは、一体何だったのか。

注

文中※※は、瀬川 著「虚構世界の狩人―私的オーディオ論」

共同通信社より引用



「独善的邪頭論」

(五一年卒)

上川路 孝博

七〇年代中頃からファンキージャズが流行り出してからというもの、シンセサイザーなどの出現により音そのものが電氣的になり、なんともロックっぽいサウンドになってしまった。コアコースティックサウンドに戻りつつあるのも事実であるが、それに伴ない聴く人々も若年令化してきた。ジャズを聴き始めたのは六〇年代の後半であったが、当時は六〇年前後の、マイルス・デビス、ジョン・コルトレーンなど現在に致しても名盤といわれるいいレコードが沢山あった。N.H.K.・F.M.では毎週ジャズフラッシュという番組があり、ジャズファンにとっては必聴であったし、いい情報源でもあった。最近の番組はどれもフュージョン、クローパー系のジャズで、歴史的な流れに対する配慮に欠ける構成であるため、単に音楽番組でしかない。

ジャズ喫茶にはよく行ったが、最近のジャズ喫茶の大家衆場化はあまり好ましくない。ファンの若年令化に文句を言う訳ではないが、リクエスト曲はミューハリの飽つぱく、BGM風で無味乾燥、ポプラー・ミュージックを何らかわらない。ジャズ源初の問題に

立ち返れば、酒を飲みながら、タバコの煙の中で足をならし、手でリズムをとりながらスウィングする。それで結構なのであるが、もつと積極的に参加する必要がある。ジャズの生命、それは即興性そのものであり、一回性であり、演奏する側と聴く側の一体感であり、それこそ対決であると言っても過言でない。そういう意味から考えると、レコードは自己矛盾を孕んでいて、疑似イベントであるから、臨場感を盛り上げようとするなら、出来るだけ忘れた頃聴くのがいいし、一回で忘れなければならぬ。もし即興のメロディラインが鼻歌で出てくるようだと最悪である。

最近ではレコーディング技術が発達したため、音的には非常に秀れて、その再生機器も恐ろしく忠実に再現してくる。しかし、このため即興、一回性の面白さがなくなったことも事実だ。五〇年中頃のレコードは悪評高い(一)名盤が多い。マイルスとモンクのクリスマス喧嘩セッションと言われた「Miles Davis and The Modern Jazz Giants (54) J.G. The Man! Love」等は、名盤中の名盤である。当時LPは、音そのものは良くないが、確かに聴きごたえがある。今は音楽性が脇役となり、音が前面に出すぎ、どれもこれも音、

音、音で迫ってくる。我々は音を聴く必要はなく、音の繋がりを楽しむのである。そして、その緊張感を楽しむのである。もちろん音自体も必要不可欠であるが。

広島でも七三年頃からオールナイトジャズフェスティバルが催されるようになり、また郵便貯金ホールでのコンサートも盛んに行なわれるようになった。しかし、一段高いステージで何百人もの観客を前に演奏するのはジャズではない。聴衆と演奏者との物理的距離がそのまま身体的距離になり、一体感を疎外する。ジャズはもつと自分の側に引き寄せて、みんなが盛り上げるものだ。そうでなければ、もうショーでしかない。我々はショーを見に来たのではなく、参加しに来たのであり、出来れば、ひっくり返しに来たのであるから。そういう意味では、今年(80)の9月に広大学生会館で行なわれた、田中の舞踏(彼自身は舞態と呼ぶ)は、実験的な空間であり、緊張感をもつて参加することが出来た。今回は、楽器を使わず、同一の床で三〇人ぐらゐの観客が彼を取囲み、我々の肉声合唱と彼の身体とが呼応するという舞踏空間であった。それは真にジャズそのものの空間でもあった。今後大いにジャズろう!

学生時代の思い出

(五十二年卒)

角野 秀二

学校を卒業して、早や四年が過ぎる早いものである。学生時代の思い出といわれ、一番先に思い出す事は、クラブ活動の事である。(勉強でないのが残念ではあるが……)

私は、落研に入学していたのであるが、四年間楽しく過ごさせてもらった。クラブハウスの屋上で大声をはり上げて、発声練習をした事、寄席前に嘶を覚えてなくて、あせった事、他大学と本通りで、客の呼び込みをした事など、今考えれば、はずかしいような事をよくやったものである。しかし、クラブ活動外では、知るこのできない、先輩、後輩、及び他学科の同級生などと、知り合えた事は、良かったと思う。又、クラブ活動を、放れての学生生活においても、高校時代などとは、広範囲での、友達が出来たことも、良い思い出である。

が、ある程度、時間に制約されなかったからこそ、出来たのであろう。その時間を、もう少し、有意義に、使っていたならば、クラブ活動、勉強においても、もつと楽しい学生生活が、おくれたのではないかと、つくづく考える今日である。

(NOV 80 記)

学生時代の思い出

五四年卒業 渡辺 隆三

学生時代の思い出と言えば、ゼミの思い出が特に印象深い。私がいたゼミは橋ゼミである。橋ゼミは図面中心のゼミであった。私もだいたい、鍛えられたものである。まず、最初に文字の練習、線の練習、等々、基本をみっちりやらされたものである。それが、今、けっこう役立っている。

また、橋ゼミは、橋先生を筆頭に、飲み助け“が多いのも特徴である。事あるごとに我が橋ゼミは、“飲み会“を行なった。そして二次会・三次会と大騒ぎをしたものである。

また、大学祭の前などはゼミ室に泊り込み、出品作品を皆で徹夜して作ったりした。

こんな楽しい思い出が、私のゼミの思い出である。そんな楽しい思い出のあるゼミも橋先生が大学をやめられてなくなってしまったのは、さみしい限りである。

warm gun
oh, wonderful.
shot shot shot
hoo……the end

〈大学時代〉

S.54卒 原田 順司

「大学時代の思い出」について

(上野谷建設機)
(五四年卒) 本吉 敬二

別に取り立てて、「思い出」らしい事はないのですが、一つははっきり言えるのは、“学校と仕事とは、全然違う”、と言う事です。生活自体も、自分の廻りの人達も、他人の自分を見る目も……。

そんな中で、今、学生時代の思い出が、これと言って無い自分ですから、“今”を、いかにして乗り越えていく(少々オーバーですが)かが、精一杯でありまして、昔の、気楽な事は、一つ一つ、はつきりと覚えてないと言うか、思い出せないのです。

そんな中で、落ちついて、ゆっくりと考えてみると、アルバイトの事、旅行の事、卒研、麻雀、パチンコ、等、誰もが持っている思い出を自分も持っている、と、再認識するのです。

不思議に、学校での事よりも、自分の時間の思い出が多いように思っています。前述した、アルバイトについて、ちよつと触れてみますと、仕事の内容は、別にして、三年間も続けたわけですから、学校の帰りに行ったり、学校を休んで行ったり、数多くありました。わずか三年間で、学校以外は、ほとんどと言って良い程、アルバイトに行っていたのです。だから、やめようと思つた時も、何回か有ったわけでは

でも三年間続けて、良かったと思つています。その三年間の月日が、自分にとって何らかの意義を持っていたように思ふのです。うまく、表現できないのですが、一つの事をいつまでも、自分の納得の行くように続けていく事、その事が、重要で、欠けがいの無い物のように思ふのです。

話が横道に逸れているようですが、“思い出”と言って特に無いものですから、何か、自分にプラスになったと思える、アルバイトについて少し述べてみました。

敬 具

「焼きめしとチュー力」

谷口 哲章

どの教室よりも明るく、冬は暖かく夏は涼しい、見はらしの良い部室がある。又、その部室の活気たるや、どの授業時の教室よりも勝っているにちがいない。

昼食時には、文字通り蛇列と、あぶなげにうどんとカレーを運ぶ者、食器をかたずける者でこつたがえす。

学食のメニューの中で、これはうまいと人に自信をもつてすすめられるものは、残念ながら何一つと無い。そんなメニューの中で、何を食べるか迷つた時、必ずといっていいほど食べる

のが、焼きめしと中華ソバというパターンである。さしてうまいとは思わない、しかし、自分の好みに合うのか、量的に適当なのかよく食べたものだ。

クラブの練習で歯を折った時にも……退屈な授業にねむ気を起こし、空腹でねられない時にも……。ゼミの

ゼミの徹夜でボーとする時にも……。その時々にかかわらず、少し黄味がかつた、ごはんの色に細かくきざまれた赤いハムがまぎった焼きめしと、クチャクチャにちぢみ上がった、あぶらみばつかしのヤキバターが、もうしわけに入っていた中華ソバは、けつたいな味覚と思ひ出を含んで腹の中に入った。



学生時代の思い出

大成建設(株)広島支店

建築部設計課

(五五年卒)

高原理恵

五三会の皆様はじめまして、私は去年度卒業したばかりのフレッシュマンならぬフレッシュウーマンです。

さてこのたびは、私の学生時代を語るということですが、未だに学生気分が時折顔を出すうら若き乙女？である私にとって、学生時代は、過去の思い出ではなくつい先日のことのようなものです。

入学当時、建築科三〇〇人中二人という工大にとって貴重なはずの女性の片われであった私にとって、男なんかに負けないゾという気負い、倍率から考えても大切に扱ってもらえるのではなからうかというアマイ期待、女だてらに技術系しかも建築科なんて大丈部かしらという不安が、私の大きな胸？の中であけめぐっていました。

しかしそれも束の間のことでした。数が多いから特別待遇がしてもらえるのではなく、数が少ないから無視されることに気が付き、クラブ(パトミントン部)では腕をまくり女性とは思われぬ大声を張る。また、ゼミ(菅原ゼミ)では夜遅くまで図面を書くといった普通の女子大では味わえぬ貴重な経験をしました。そして経験の中で、男性の表・裏両面を見て、表面だ

けで判断してはいけないと実感しました。現在は仕事としている設計も当時は、夢いっぱい絵の描けたけれど、その絵書きの連続の中から建築への興味がめばえたのだと思います。不安と焦燥で満ちた入社時に比べ多少なりとも仕事にも慣れ、全国の建設就業員の一員として、自己の枠内で精一杯がんばろうと思っています。何かの機会に御一緒することがありましたら、色々と教えてください。

私の学生時代

協和ハウス建築部勤

(五五年卒)

佐々木 善崇

私が工大を卒業してから早一年が過ぎようとしている。この一年ではっきり感じた事は、「学生時代が一番楽しかったナァ」という事です。とは言

ものの、今思えば何が楽しかったのか、個別にあげることとはできない。では無意味に過ごしたのかと言うとそうでもない。入学当時は他人の真似の出来ない事をやらうと張り切っていたが、友人等に比べ未知な物が多いのに気付く、一つの物に集中するのではなく広く浅く何でもやろう、そしてその中から自分に合ったものを見つけ出そうと思ひ、色々なスポーツ、遊びに挑戦した。結果的には、交際範囲も広がりました。数多くの友人も得、人並な雑

学返識もついたと思う。元来楽観的な私にとって、有意義な学生時代であったと胸を張れる。

最も広く浅くを身上としていた私も、クラブ(スキー部)だけは、一つで通した。正直なところ、クラブに入っただけで、正直行くところ、クラブを利用して女子校に近づいてやろうという不純な動機からであり、入部当初は、練習にはあまり身が入らなかった。が試合に出場したり、下級生が入って私にも噴きし、練習には欠かさず出るようになり、冗達？もし、それなりの興味も持ち始めた。このような学生時代を送って身につけた「視野を広く持ち、その中から自分に合ったものに追求する姿勢」はこれからの生活に役立

ていきたいと思っています。



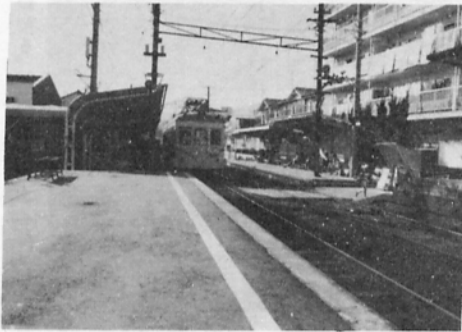
三筋川河畔

楽々園の電車の停留場から、工大まで歩いてみようと思い、昭和十五年一〇月末、国鉄で五日市まで行き、五日市で広電に乗りかえた。ひさしぶりに広電宮島線に乗った。しばらく乗らないと、電車の乗り方も変わってしまった。名駅に乗車券の黄色いボックスが置いてある。つまりバスに乗る時に、「乗車券をお取り下さい。」という例のあの箱の大型のものが、各駅に二〜三台置いてあるのである。なるほどねと思い乗車券を取る。機械の横に赤字で、むやみに取って遊ばないように書いてあった。さて、電車がやって来た。広島駅発の宮島口行きの直通電車、例の屋根が濃いピンクで胴体がうすいピンク色の二両連結の電車である。自動ドアが開き、乗ろうと思うと、降車専用と書いてある。つまり乗るドアと降りるドアが決まっているのである。あわてて重たいカメラバックをゴトゴト言わせながら乗車口へ向い、電車に乗

り込んだ。車内は昔のままである。車掌さんはいるがキップは売っていない。「エー両替の方はいらっしやいせんか。」である。何かしら市民球場の「エーコカコーラーいーすか」を思い出した。なつかしの楽々園の停留所だった。

電車の運賃表を見ると、八〇円と書いてある。八〇円と乗車券を降車口のそばに置いてある現金箱に入れて降りるのである。チャリンと音がすると、運転手さんがジロリとお金を確める。ワンマンバスの降り方とまったく同じである。

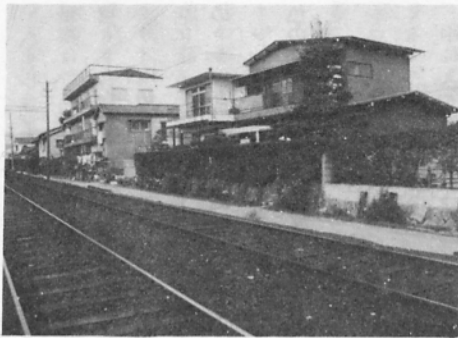
廻りの様子はかなり変わっていた。停留場の北側は確か、「今田医院」という病院じゃなかったかと思う所に、五



楽々園停留所

階建の白いマンションがデンとふんぞりかえっている。南側の駅の雨よけの庇と背中合せにあった、「レストラン楽々園」と「広電の売店」は取りこわされて工事中であった。しかし、停留場は昔のままである。多少増築されているが、昔のままである。あの高い停留所と低い市内電車用の停留所。うす汚れてペンキのはげかかった雨よけの庇。そして、座ればカタカタと音のする出来の悪い色あせたプラスチック製の長イス。それらが初冬のやや傾きかけた淡い光の中で、すでにかなり遠くなってしまった学生時代へと、私をすい込んで行った。

さて、歩いてみよう、昔、毎日毎日通った道を、夏の暑い日に、冬の寒い



通学路の広場

日に、雨の日などは、昨日徹夜して仕上げた図面を今日の一〇時の締切りに間に合わせようと、図面の濡れるのを気にしながら。通った道を歩いてみよう。

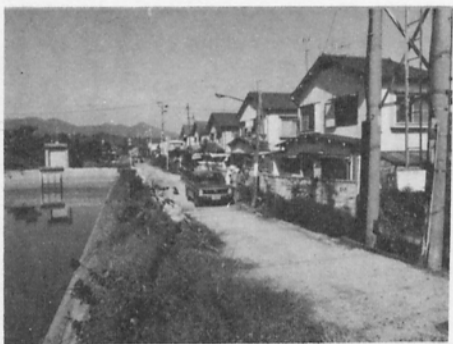
道がない、道というより、広場がなくなっている。電車を降りて、線路づたいに少し廿日市側に行った所の、あの通い道の駐車場が住宅に変わっているのである。敷地の廻りをきれいな生垣で囲ってある。石垣と有針鉄線の垣根の枕木だけが昔と同じに残っていた。しかたがないので、線路ぞいに三筋川まで出て、線路の北側の道路の方に廻ってみた。松の木があった。この松の木は覚えていいる。確か病院の横の露地のそばに生えていた松の木だったと思う。ドブ川はそのままである。ドブ川の向



病院の松の木



三筋川の松並木



通 学 路

う側の家も昔のままに残っていた。

線路の北側の道路を西に行き、三筋川につき当る前に道を右に曲ると、小さな鉄工所があったのを思い出して行ってみる。しかし、万能塀に囲まれて工事現場になっていた。中がのぞけない、しかたがないので、今一度、広電の踏切を国道に向いて行き、海老橋の北側にかかっている歩行者用の橋を渡り、三筋川の西側に出て湯来町に行く。バス路線を工大に向けて歩いて行った。広電の踏切を越えた所で工事現場を見ると、ドブ川のポンプ小屋らしきものの現場らしかった。昔あった鉄工所はもう姿が見えなくなっていた。

さて松並木は、と思い国鉄の踏切を

わたる。そのままであった。夏の暑い日、少しの日影を求めて汗を拭きながら歩いた松並木が、少しも変わらず、今なお、青々とした色で目の中に飛び込んできた。大学に通いだして一年目だったか二年目だったか忘れたが、松の根元を踏固めると松が枯れるという事で通行禁止の立て札が立った事がある。太陽を見上げながら「この暑いのに」と思った事を思い出した。

さて渡ってはいけない、国鉄の鉄橋を列車が来ないのを確かめ、三筋川の東側に渡り、松並木を、ドブ川越しに左手に見ながら、もう少しどうにかならんものかいな、このドブ川はと一人でブツブツ小言を言いながら、五観橋までやって来た。

みすじ食堂がある。三筋川の向うに、屋根はいささかくたびれた青色の瓦棒壁もくたびれた外装合板、青と白のストライプのビニールの庇、二階の喫茶店に上る階段の入口上部にあるピンクのテンとも、全く昔のままである。

ショーウィンドーも入口のクリーム色の扉も昔のままである。昔と変わったと言えば、角のブロック屋が、ガソリンスタンドになったのと、五観橋が広くなった事ぐらいだろう。

中に入ってみよう、ちょうど腹もへって来た事だし、九年ぶりにみすじのそば入りのお好み焼きを食べてみよう、と思ひ入口の扉を開けた。

店に入ると、お客さんは五、六人、学生はとみると、二人しかない。食事時なのにいささか少ないな、と思いながら、鉄板の前に座る。昔のままの鉄板である。床もモルタルのまま壁もプリント合板、天井もイスもテーブルも畳の間もおかずの入れているショーケースも全く昔と同じである。変わったのは、おばさんの髪に白いものが少し目立ちだしたのと、顔のしわが多少ふえたのとお手伝いの人の顔ぐらいのものだろうか。

「ひさしぶりじゃねえー」と、おばさんがニッコリしながら言った。

「覚とっちゃった」

「覚とるよねー。どうしよったん。」

「元気にしとるよ。今三滝に住んでるんじゃがね、来とお、と思うとたんじゃが」

遠おしいけーなかなか来れんのよ。

喫茶のおねえちゃん元気にしとる。」

「うん、おねえちゃんも、結婚してもう三人目が、おなかの中に出来とるよ。」

「はんとねー、会いたいのにー」

と、話が弾んで来る。そば入のお好みをつたのむ。

「学生さんが少ないようじゃが、わしらーのときゃー、座る所がのて、待つようになかったがのう」

「はおよね、あの頃が一番楽しかったよね」

「みんなどこでゆし食べよらんかの。」

「どこにいってんかかねー、昔とだいぶ学生気質が変ったけねー。」

「どんなに変ったかのー。」

「はおよねー、昔の学生さんは、何かありやーすぐみんな集まって大騒ぎしてやりよったし。一ヶ月分の食費を一週間ぐらいで使うてしもうてあとは友達のを渡り歩いて過したりして、豪傑うか、おもしろい人が多かったよねー。」

「ほおじやのー。」

「はいで、姉ちゃん（喫茶店を開いていた人）が言いつたが、恋人にふられて、喫茶店のテーブルで、ようないた人もおつたし、わしの恋人じゃうて、女の娘を自慢げに連れて来たりしよつた人もおつたしね」

「ほおよのー、わしもよお二階（喫茶店）に一日中おつた事もあつたしのー」

「あんたらーの頃が、お姉ちゃんが一番えかつたんじゃないかね。バスケットの応援に行ったり、大学祭（四六年度の大学祭に建築学科で音楽喫茶を開いた。）にひっぱり出されたりしよつたけえ。あんたらーが卒業したら、何

を思つたんかしらんが、すぐ喫茶店を閉めてしもうた。」

「今の学生さんはどうかの。」

そば入りのお好み焼が出来上る。

「今の学生さんは何ゆうか、おとなしいよね。」

「どんとにおとなしいんかの」

「ほおよねー、どんとなゆうて、まあ下宿の人がうるそうして欲しいゆうないゆうもあるんじゃないかと思うんじやが、一人でレコードを聞いたり、本を読んだり、パチンコをしたり、金使いはあまりやうないようなね、アルバイトもあんまりしてんないみたいなし、なんか、親からの仕送りで細々と暮らしとるようなねー、そんな感じがす

るよ。」

「さびしいのー」

「さびしいゆうか、社会全体がそんなになつとるんじゃないかね。自分の事だけで、他の人が何をしても知らん顔しとつてじゃろ。」

「ほおよのー。」

話はつきなかつた。

お金をはらおうとすると。

「いらんよおね、なつかしんで尋ねて来てくれたんじやけー、それだけで嬉しいよね、おばちゃんのおごり。」

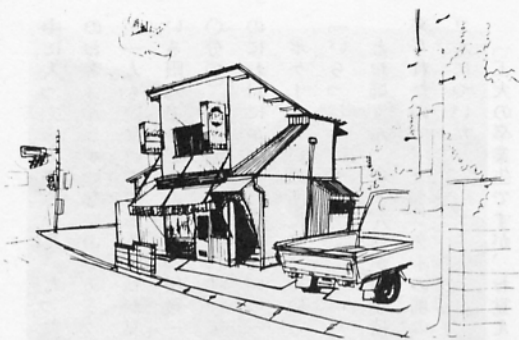
今度来る時、嫁さんと子供を連れて来る事を約束して店を出た。

店を出て百円も行かないうちに御存じ楽園がある。食後のコーヒーをと思ひ、寄つてみる事にした。

楽園の前に立つ、何と、この店もみすじと同じく九年前の姿と全く同じである。かなり色あせたコココーラの看板、外壁のリシンの色。

昔はかなり鮮やかであつた庇のテントの赤い色。玄関右側の茶色のタイル、店の廻りの花壇のレンガ、全てが九年前と同じである。

店に入ろうとして、少しとまどつた。店の中にお客さんの影が見えないのである。おかしいなと思つたが、営業中と札がかかつている。ままよと思つて



みすじ 食堂の内部

中に入ってみて驚ろいた。たった一組のお客さんしかいないのである。学生が一人もいないのである。私が覚えてる限りでは、この時間（午後一時三〇分頃）で楽園がこんなにすいているのにお目にかかった事はない。

ポケーと入口の所に立っていると

「いらっしやいませ」

とお姉さん（奥さん）が水を持って来られたので、カウンターの前のテーブルについた。

「工大の卒業生ですが、お覚えていらっしゃいますか」

と今度は私の方から聞いてみた。

「お名前は覚えていませんけど、入

って来られた時、わかりました。」

「そうですね、ひさしぶりにこのあたりに来ましたので、なつかしくなつてちよつと寄つてみたんですけど。」

「そうですね、ありがとうございます。」

「コーヒーください」

（私は楽園のおばさん、お姉さんとあまり面識がないので、言葉遣いが急にいいいになる。）

この店の内部も変つていない、床、壁、天井、カウンター、イス、テーブル

ル全て九年前のそれと全く同じである。ただ、テーブルの配置が多少変つたぐらいだろうか。コーヒーが来た。

「学生さんがおらんようですが、どうしたんですかねー。いつもこんなんですか。」

「そうですね。」

「私らが学生の頃は店の中は学生だらけだったですがね。どうしたんですかね。」

「そうですねー、学生気質が變つたんですかね。なんかこういう店は今の学生に合わんでしょう。」

「同じような答が帰つて来た。どんどんですね、今頃の学生

さんは」

私は少し興味を持つて聞いてみた。

「そうですね、おとなしいですね。」

おとなしいというより、真面目な人が多いですよ。

学校の講義が昔より厳しくなつたんですかね。学業の他にあれもしよう、これもしようという欲のある人がいなくなつたみたいですね。昔の人は、学業そつちのけで、毎日がお祭りみたいな人が多かつたですすけどね。」

お母さんも話に加わつて来た。

「それに、お金のある人と無い人がはつきりしているみたいです。ある人は月に二〇〇三〇万の生活をしてい

るし、無い人は、パンのヘタをかじつて一生懸命英会話の勉強をしている人もいるし。でも、やっぱりお金の持つている人が払つてくれるみたいです。

そのへんは思いやりというか、やさしさはあるんですね。」

「そうですね、何か私らの頃とだいぶ變つて来てますね。」

「そうですね、昔の人はよくこの店に来て騒いでいましたよね。」

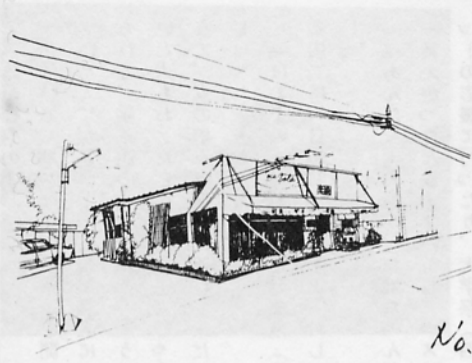
「どんなグループが多かつたですかね。」

「ラグビー部とか、写真部とか、ラグビー部の人達は、試合が終わるとよくここに来て、反省会を夜おそくまでやつておられたし。写真部の人達のたまり場だったですね。戸川さんは今頃でもよく来られますよ。」

「そうですね、楽しい思い出もずいぶんあるでしょう。」

「そうですねー。楽しいというか、嬉しいというか、ワングルの人なんか北アルプスの大きな写真を持つて来てくれちゃつたし、写真部の人には、卒業記念にといつて自分の一番大切な写真を持つて来てくれたりして。

何んかこう、肌と肌との付き合いと



喫茶“楽園”の内部

ゆうんですかね。夜の更けるのも忘れて、人生問題、恋愛問題を話し合ったですよー。」

「今でもまだ、その頃の人と行き来されていますか。」

「ええ、ありますよ。結婚したと言ってお嫁さんを連れて来てくれた人もいるし、子供を連れて見せに来てくれる人もいるし。ある人なんか、学生時代に世話になったからと言って、卒業して、ずーっと、最近まで御歳暮を送ってこられる人がいたんですよ。元気な事が解ればいいから、顔を見せてくれるだけでいいから。と、やっこの事で御歳暮をやめてもらいましたね。本



坂 道

当に嬉しいですよ。」

この店でもコーヒー代は受取ってもらえなかった。尋ねて来てくれただけで嬉しいと。

工大の坂は昔のままであった。道の両サイドにある、針葉樹がかなり大きくなった様に思えた。あと一〇年もすれば、暑い夏の日汗を拭きながら登って行く学生達に、木影を与えてくれるだろう。

ほんの少しの昔だと思っていた。停留所も昔のままであったし、三筋川も松並木も、みすじも楽園も昔のままであった。しかし、やはり九年の月日は流れていたんだなーと、つくづく思った

九年の月日の流れを私はみすじと楽園で見たと思った。

文 保井英三
絵 増田五雄

48 47

EE諸国住宅地 事情観察

(市役所勤務)
(四七年卒) 生田 文雄

同窓生の皆様方には、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

私、昨年九月上旬に職場の命によりましてEE諸国の住宅地事情視察団の一員として参加いたしました。

訪問した都市は、ストックホルム、ヘルシンキ、ロンドン、フランクフルト、ジュネーブ、及びパリの六ヶ国ですが、そのうち、都市計画、ニュータウン政策の最進国として、最近、世界中より注目されておりますストックホルムを紹介したいと思ひます。

ストックホルム

〔都市計画の概要〕

スウェーデンの首都、人口六六万人、面積一八〇km²、人口密度三七人/hq、ストックホルムは二〇の市町村から成り、人口一三〇万人。

ストックホルムは、メーラレン湖とバルチック海の入江（サルトショーン）との境に位置するスタードホルメン島（ガムラストン）を発祥の地とし、水路をはさんで北と南へ発展、現在の都心は北側の再開発で有名なヘートルイット地区を含む、ローノルマム地区にある。

交通は、岩盤で構成された地層にもかかわらず、別名、真珠の首飾のような都市と呼ばれるほど地下鉄が発達し、九路線、全長約七〇kmで、これに沿って住宅団地が計画的に建設されるといふ郊外宅地開発の見本のような展開がある。年代の早い順に、西のベーリングビー（都心から約一五km一九六二）、南のファルスタ（約一〇km一九五七年）、北のテービー（約一一km一九六一年）、南西のシエルホルメン（約一一km一九六三年）、北西のヤルバフェルテ（約八〜一五km一九六七年）等がある。これらは就業施設も完備した自己完結型の団地であり特徴的である。

市における都市計画の担当は、技術開発局で約六〇〇人の専門家が働いており、土地の開発計画と管理を行ない、

特に住宅建設等に関しては強い政策決定権を持っている。局の業務としては他に不動産部と道路部がある。

一八七四年に建築法が制定されたが、この法律は細部にわたって述べられており、一九五三年に再開発を必要とする地域に対して土地収用ができる等の若干の修正もあるが今日もなお有効である。この法律により民間の開発を制御できると同時に、ストックホルム市では、一九〇〇年代の初期から意欲的に土地を取得、市街地では七〇%を所有し、市域外にも及んでいる。

こうしたことの結果、都市計画事業はスムーズに進行し、今や新しい計画の余地もなく、古い建築物の改築を手がけていくとのことである。

〔住宅地事情〕

スウェーデンは、第二次大戦において中立を保持したので戦火は受けなかったが、戦時中の住宅建設の停止、都市への人口集中、狭小住宅の依存等による住宅難が著しく、高い住宅水準を確保するため、①過密の排除、②一室のみの世帯用住宅の禁止、③高い住宅水準、④都市地域と農村地域の住宅水準の格差是正をにかけて、年間一〇万戸のペースで積極的に住宅建設を推進してきた。ストックホルムにおいては、特に一九五〇年に地下鉄がひかれたことに伴うベリングビーの建設以来、地下鉄の延長と一体的に毎年新しい住宅団地を建設してきた。団地の基本的なパターンは、地下鉄を持つセンターを中心にはば一kmの圏域に高層、中層、低層住宅を順次配し、人口約二万人の団地を構成するというものである。しかし最近では高層住宅に対して批判が集中し中低層住宅を主として建設計画がなされつつある。

戦後民間のシェアが激減し、低金利、補助を利用して市、住宅公社、H・S・B（住宅建築貯蓄協同組合）、SR（スウェーデン王国建築組合）等が、市の先行取得した土地に住宅を建設する方式が主である。

住宅は全体に充足されており、現在の課題は既成市街地の古い住宅に対する根強い需要に支えられたこれら住宅の改善にある。

市は一九七〇年代の住宅改善として、「良質な住宅」「良好な環境」及び「適正な家賃」という基準をにかけてい

る。良質な住宅とは①セントラル・ヒ
ーディング、②浴室又はシャワー、③
十分な設備の台所、④（できれば）エ
レベーターを備えた住宅であり、この
基準をみたす民間の住宅改善には市が
資金を融資しており、古い街なみを保
全すると共にアパートの居住水準の向
上を図っている。

〔ローノルマルム地区〕

ストックホルムの都心機能は、ロー
ノルマルムと呼ばれる約一七〇haの地
区に集中している。この地区は、スト
ックホルム市への人口増加にもかかわらず、早くから商業・事務所が集中し
人口減少を示していた。都市の成長に
伴い一九四〇年代の都市計画によりつ
くられたこの地区は、特に交通問題が
大きくクローズアップされ、このまま
では市の中核的役割を遂行することが
むずかしくなり大量輸送機関導入等の
大規模な整備が要望された。そのため
市ではこの地区を行政、業務、商業、
文化の魅力的な街の創造を基本理念と
して一九九〇年には、ストックホルム
圏人口一五〇万に対応する都心ローノ
ルマルム地区の就業人口二〇万人を予

測し、これらの就業者の七五％は地下
鉄を利用し残りは自動車を利用すると
してローノルマルム地区再開発計画を
立案した。

これによると一九五三年を第一期と
して三期に分け、二五〇〇台の駐車場
をパーキングビル建設五〇％、地下駐車
場四七％、路上駐車場三％の構成で計
画されており、自動車対策と通勤輸送
対策の二つが大きなウエイトを示めて
いるのがわかる。

特に第一期（一九五一年～一九六二
年）に着手したヘートルイエット地区
は、ローノルマルムの中心に位置し、
一八階建の板状の事務所を小売店舗、
飲食店、銀行などの低層の建物で結ん
でその屋上をペDESTリアンデッキと
して映画館への出入口とすると同時に
地上のセルゲル広場を囲むように配置
している。セルゲル広場は地下鉄駅と
結ばれたセルゲルトルクの地下広場に
連続している。ペDESTリアンデッキ、
地下鉄駅に結びついた地下広場、自転
車専用道路と地下駐車場などの技法を
用いて歩行者と車の動線を完全に分離
し、事務所建築と商業飲食施設を復合
させて都心的な活気を演出している。

〔キスタ・ハスビー・アカラ団地〕

ヤルバフェルテは、市の北西八～一
五kmに位置し、長さ一三km、幅二～四
km、面積五〇〇haの広大な地区で、
ストックホルム市を含む五つの自治体
が土地を所有し最新の開発計画を進め
ている。二つの分岐された地下鉄路線
により、南北に分けられ、南ヤルバフ
エルテのテンスタ・リンケビー団地よ
り着手された。

北ヤルバフェルテは、八五〇haの敷
地にアカラ（四二〇〇戸）、キスタ（
三八〇〇戸）、ハスビー（四七〇〇戸）
より構成され、ヤルバフェルテ計画の
基本的原則である、①各戸から駐車ス
ペースまで一五〇m以内、地下鉄駅ま
で五〇〇m以内でいけること、②歩車
分離、③高密度開発でかつ自然をのこ
す、等の配慮し、さらに今までの計画
の改善案として①住宅は幹線道路より
三〇〇m以上離す、②住戸から職場ま
で三〇〇～七〇〇m以内とする、③プ
ロックコート（各村の建物を公園、ス
ポーツ施設によつて取り囲み保存する）
方式等を取り入れている。この中でキ
スタ団地は、最も新しい団地であり

中心部に多くのサービス施設を建設す
るために細長いセンターを配置する方
式を積極的に採用して、ヤルバフェル
テ地区のセンターとしてショッピング
施設、各種の文化教育施設を設けてい
る。さらに、従来の画一的住環境の反
省として都市的デザインの工夫、中低
層中心の計画、あらゆる階層、世帯の
ための型別供給などを配慮している。
また、建設、環境、管理を含めた総合
施工入札コンペ方式を採用しているが、
この開発不成功な場合の損害等の問題
もあり今後が注目されている。

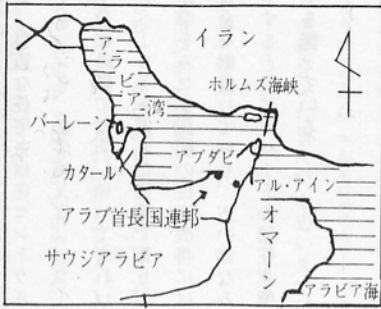


アブダビ体験記

(昭和四十九年卒)
須賀 良二

昨年十月より約4ヶ月間、今日、石油問題で注目を集めている中近東の一国、アラブ首長国連邦に行ける機会を得た。十年前迄、「ラクダと砂漠」の国でしかなかったのが、「黒い黄金」と言われる石油によって非常な勢いで近代化の進んでいる国 U・A・E。初めての海外生活を送ったこの国の印象、体験等を書いてみたい。

アラブ首長国連邦は、ペルシャ湾の中ほどに位置する、北海道とはほぼ同じ広さを有する国。人口約九〇万人で、その内有国者はわずか二五万人。残り



はインド・パキスタン等からの出稼ぎ者で占められている。迎えに来てくれたI・H・Iの人達と共に、現場の宿舎に向かう。現場は、アブダビから約五〇km離れたマフラックに建設中の下水処理プラント。イギリスの設計事務所、石川島播磨重工業がメインコストラクターとなり、三井海洋開発(日本)・東亜建設(韓国)等のサブコンを使って工事を進めている。私の役目は、空調・換気設備に関する竣工図面を書く事であった。

仕事を始めて、まず、驚いた点は、何かにつけて常にレターを送る事であった。設計変更、打合せ記録、材料一つの承認に至るまで必ずレターを出して確認し、控えをファイルしておく。工事が始まって以来、過去三年間のファイルが棚にずらりと並んでいる。後で何か問題が生じた場合、これが動かぬ証拠となる。施工のひどきにも驚かされた。空調工事は、東亜建設から地元の設備会社に請け負われていたが、施工図も起こさないで工事を進めている。従って、精度は悪くやり直し工事は、日常茶飯事であった。

砂漠での単調な生活だけに、休日

(金曜日)、アグダビに買い物に行く事が、唯一の楽しみである。道路は障害物が何もないので、巾は広く、正に、一直線である。いい気持ちで助手席にすわって居て、ちよつと横のスピードメーターを見ると、何と、時速一五〇km以上。思わず「ドキリ」とする。信号はなし、スピード制限もなし、しかもガソリンは安いときている。正に、ドライバーにとっては、天国である。砂漠の国の人達にとって、昔からの願いは、緑あふれる大地。中央分離帯にナツメヤシ、両側にユーカリ、アカシヤなどの植林帯が切れ目なく続く。砂漠の下一〇〇mからポンプで汲み上げた水を、木々の根元に延々とまとわりついたパイプを通して散水しているのである。市内に入ると、青々と色づく芝生のグリーンベルトが目に入ってくる。一〇階・一五階の近代ビルが建ち並び、世界各国の商品が陳列されている。その中で日本商品が多いのは、驚かされる。自動車、電気製品から、インスタントラーメン、豆腐(即席)まで売られている。特に車に関しては、走っている車の八割以上は「TOYOTA」「NISSAN」と大きく

マークの入った日本車。

ギラギラと照りつける太陽が沈み、モスク(イスラム教寺院)から祈り声が流れ終ると、スーク(市場)は急に活気を呈して来る。ダーバンを巻いたインド人、ダブダブのズボンをはいたパキスタン人。黒いベールで体を覆い決して顔を見せないアラブ女性。これらの人々の中をただ一人歩いていると、本当に外国に来ているのだという実感がわいてくる。

今日、日本はアメリカに次ぐ経済大国と言われる。確かだ、品質の良い日本商品を多く見、又、「Japanese」と言っただけで、驚きの表情を示す地元の人を見ると、一種の誇りを感じる。今、大学でこれらの最新の技術を学ぶ事はすばらしい事と思う。と同時に、これから語学力も重要になってくると痛感した。身振り手振り、ある程度は伝えられるが、本当に相手を理解し、自分の意志を伝えるには、語学力がないと限度がある。

あきらめかけていた英語を、もう一度勉強しようと思ひ直した事が、今回の出張の成果のようです。

アメリカ生活奮戦記

— ワシントン大学での一年間 —

工大建築学科講師
西川 加禰

はじめに

卒業生の皆さんお元気ですか、私も考えてみますと広島工大に勤務するようになって早や十三年目を迎えようとしております。しかし、それ相当の期間にみ合う成績はと云われてみると、自分ながら狼狽 目を伏せなくなる心境です。でも過去から未来へ、次のステップへと常に前向きに情熱をもやす若さは失っていないつもりです。これを延明するわけではありませんが、ついに私も日本を飛び出しました。

昭和五四年八月から一年間、アメリカの住宅建築を研究するためワシントン大学に留学、その間の自分の下宿探しの苦勞、アパートでのトラブルなどを通してアメリカ人の生活、私の赤ゲット振りを紹介し、称して住居さがしの体験的実践研究をつづけてみました。



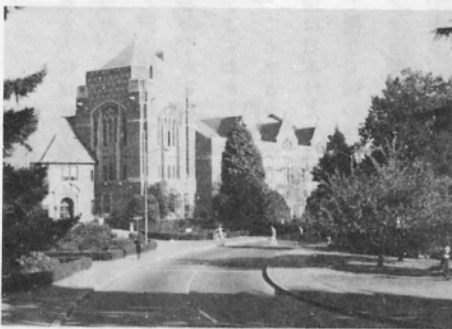
ワシントン大学 建築棟

ワシントンD・Cと

よく間違えられる

ワシントン大学は、アメリカ北西海カナダのバンクーバーに近いシアトルにあり、北緯四七・六度、カラフトの中南部に相当する。人口は市部約六〇万人位、近郊を含めると一一〇万人と云われ低い丘陵地帯は沢山の潮が入りまじり、住宅は豊かな水と緑の中に包みこまれるように拡がっている。気温

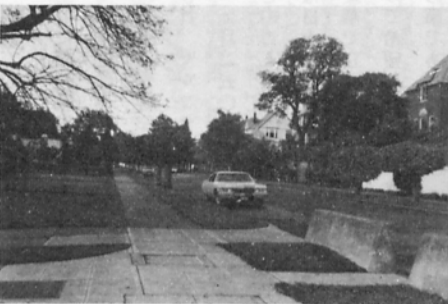
は年平均一〇・六℃、最低平均六℃位、最高平均一五℃位で冬暖かく夏涼しい。時に五月〜九月は晴天が続き、涼しく、あらゆる花がいつせいに開花し、緑に囲まれた、カラフルな住宅、広い潮に浮ぶヨットの白布の景色は、空気が澄んでいることもあつて一服の絵のよう



である。

ワシントン大学はこのシアトル市の中心部からバスで約二〇分のところにあり、学生数三・五万人を擁す州立総合大学で北西岸最大で美しい大学とされている。

私がこの大学に初めて到着したのは八月二二日であつたが、日本の初秋に似た涼しさと半そでのブラウスでは寒いほどであつた、そして、この大学のシンボルとも云える大噴水の周りの広場は沢山の種類のバラが咲きはこつていた、丁度夏休みの終り頃で学生の姿は少なく、巨大な樹木の続くかげにヨーロッパ中世風の赤レンガ造りの建物が見えがくれし、足もとの芝生が広いキャンパスのなだらかな丘陵へと



住宅街広々とした道路、歩道

てしなくのび、野生のリスがその芝生をわがもの顔にかけまわるさまは平和であり、日本の自然破かいのこわさを考えられたものである。

やどさがしの始まり

宿については日本出発前、ワシントン大学に問合せ、大学のすぐ近くに「インターナショナルハウス」と云う民間下宿屋の寮があり、外国から来た研究者などがよく利用しており、比較的安く泊れると云うので安心していたのであるが、出発直前になって閉鎖されたとの連絡が入り急きよ近くのモートルに泊り、次いで「Pierce」教授宅にお世話になりながら下宿先を探すことになった。

Pierce 教授はドイツ系白人で東

工大に半年ほど交換教授としてきた人で Visual Design

Environmental-Expert

ance Notation が専門である。

彼はこの大学での私の直接指導教授で、初対面であつたが親切で私的にもずい分お世話になった。特に、下宿探しには労をわずらわした。彼は奥さんともども友人、知人、学生などあちこち問合せてくれるのだが、自分で見に行つて、気に入らないと私には相談なしに勝手にことわると云う独断性をも持ち合わせていた。と云うより、日本から来た若き女性(?)に照れくさかつたのかも知れない。一見無難で、余り人と多くをしゃべりたがらないが、心の暖かさは行動で充分理解できた

私も人にばかり頼つてばかりいてはいけないので、大学の住宅紹介所に行つて沢山貼られている中から探そうとするのであるが、当初は独特な省略言葉がよくわからず、地理的不案内も手伝つてとまどうばかりであつた。住宅事情は日本ほどではないにしても安心して便りで居心地のよいところを欲ばるとそう簡単に見つかるものではないのである。

食事付下宿からアパートまでの色々

ここで多くの研究者、学生たちが、どのように家を借り、生活しているのか、その現状を少しくわしく述べてみよう。

大学の寮―学生の最も中心となるものの。単身者用が中心であるが、既婚学

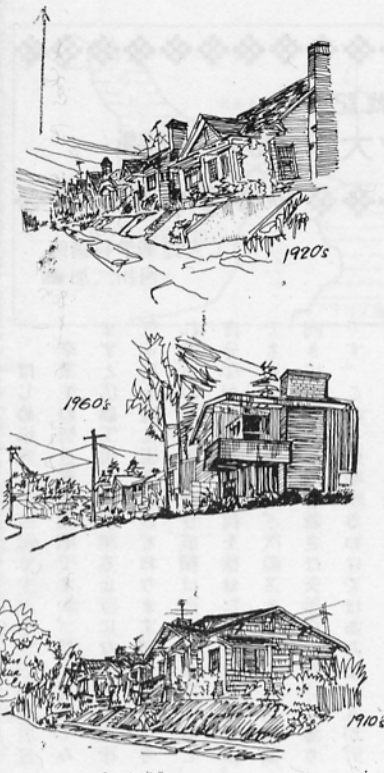
生のための家族寮もあり大体全学生の一五〇〇位にあたる六〇〇人位が入っている。三食付で一週間毎の食券が配布され、セルフサービス選択方式である。一ヶ月二五〇ドル位だが余り安くないとのことであつた。しかし建物、施設は日本とはくらべものにならないほど豪華で立派である。ビジネスホテル並みで希望しても入れないことが多いとの事であつた。

下宿 (Board and Room)

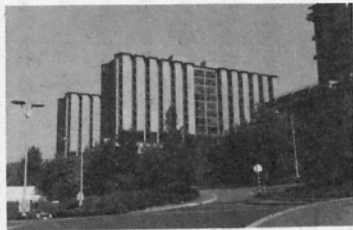
一個人住宅の部屋だけを貸すのもあるがこの場合二食付である。次第に減少傾向にあり、特に学生には人気がない。家族的であり、タオル、シーツにいたるまで用意してくれ、現地生活に早くなれることが出来るが、食べ物、経済的に食事時間などの時間的拘束、経済的に高くつくなどの短所がある。特に家族との人間関係に問題がある。

アパート (apartment) ―

日本のアパートと違い最低居住水準が高いためか家賃も安くない。家具付とそうでないものがあり、長期居住者の場合自分で家財をそろえて行くようである。給湯はもちろん、暖房もセントラルヒーティングで、台所の設備はレ



Seattle の典型的な家。
7 段の段々もよく示している。

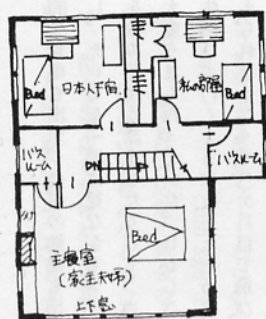


寮 (単身者用)

ンデ、オープン、大型冷蔵庫（冷凍付）皿洗い機が設置されておりすべて電気である（シアトルは特に電気が安いのでエネルギーの中心となっている。）その上水道代も湯も含安いのので家賃に含まれることが多い。しかし電話の取付けは自分でしなければならぬし、自炊用の食器類からナベに致るまで必要で、後の処分のことを考えると一年足らずの短期間の場合問題であるが、自炊が出来、周囲に気がねも入らないなど良い反面、孤独におち入りがちである。

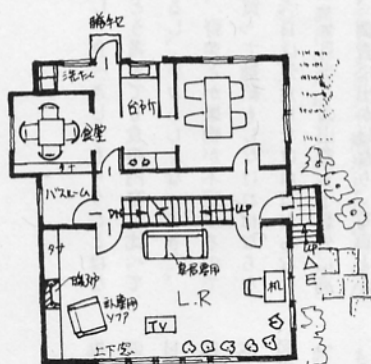
シェアハウス（Share House）

一軒の家あるいはアパートなどを借りて、五～六人で住む。学生の間では最も人気がある。従って連帯責任があり、途中での引越しとその後穴うめ、居間、台所、バスルームなどの共有部分の掃除、管理、負担等、難しいよう

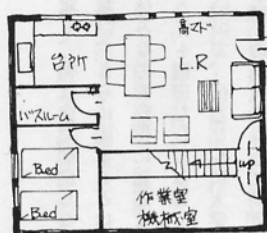


〔2階〕

最初に居た下宿。



〔1階〕



〔地階〕

であるが安外と多いのおどろかさされた。また学生同志とは限らないで社会人も混っているし、人種が違うのも普通、さらに女性、男性のみとは限らない、ある広告では「現在男三人、女一人人で住んでいるが、バランスがとれないので女性をもう一人望む」となっていた、そして、最近では老人同志男女の Share House が増えていると聞くに及んで、家族とは、家庭とは……？ 考えさせられるところである。

やっと見つかった下宿

結局のところ、ワシントン大学関係館長の紹介で大学から歩いて一〇分位、二食付下宿（但し土、日は除）に決った。この下宿は夫婦二人が住んでおり二部屋を貸していた。主人は白人でアメリカ車の船で働いていたが四五才で退職（お酒で失敗）以後定職なし六五才位であろうか、奥さんは日系二世ハ

ワイ生れ髪も黒く、小柄で顔色もよく、四人の子供は既に結婚し、小学生の孫があるとはとても思えない。彼女は夜勤しており、学校、事務所などの清掃負請会社で働いて、生活をささえ、家を買った返済もしている。このように夫にかわってよく働く女性のことを、
「She wears the pants Apparently」
と云うと Phiel 教授は私に説明してくれた。

最初私は部屋をさがすにあたつて次のような条件に近いものをと考えていた。先ず歩いて大学に通えること、

Phiel 教授宅に歩いて行けること家庭的であること、生活用具がそろっていること、生活費は五〇〇ドル以下に押えたいなどであった。これ等の目標に大体近いものであった。

その下宿はアメリカの標準からすれ

ば夫婦二人で住むには大きすぎるもので（後で聞いたら人に貸すために無理をして大きな家を買ったのだと云っていた）。木造二階建に人が住める半地下室が付いている。一階は応接、家族室を含んだ二〇畳大の室、台所、食事室、来客用食堂、があり、二階は主寝室（バスルーム付）の他に二寝室（普通は子供室、バスルーム共有）、地階は一五坪位に寝室、居間、台所、バスルーム、さらに作業室、機械室があり、全部の延床面積はざつと一〇〇坪近くであらう。

私の部屋は二階の西北にあり、二方が窓で、広さは八畳ほど、シングルベッド、机、イス、ソファ、整理ダンスと鏡、造付けのクロークルームがあり、明るく清潔であった。そしてベッドカバー、シーツ、毛布、浴用タオルも付き、そのうえラジオ（但し音量調節できない）も貸してくれるなど、何も新たに買わなくても生活を始めることが出来た。

こうして Phiel 教授夫妻同席のうえ契約書（担保金五〇ドルの領収書のみ）を交し、九月一日夜、それまでお世話になっていた Phiel 教授宅から移り、落着いて研究できるはずであった。最初の三週間はどは夫婦とも親切で家族

的な食事も出来、会話の勉強も出来るし、テレビを一緒に見ながらコーヒーを飲み色々と話をしたりして、当初は大変うまく行っていた。しかし次第に生活して行くようになるとどうにも耐えられなくなって三ヶ月目で飛び出すことになるのである。

がめついアメリカ的ゲ・シ・ュ・ク

その第一番目がハンバーグ・シ・ュ・クであった、前にも書いたように奥さんは深夜労働なので、昼間はソファで寝ていることが多い。そんなわけで夕食の支度も充分でなく、体の調子が良くないと時々主人が私と隣室の日本人を車でハンバーガーの店に連れて行き、ハンバーグ、ポテトチップス、コーヒー位で済ますのである。家族との夕食と、団らんを楽しむに帰宅してくるだけに、この味気なきは何とも割りきれないものがあつた。ちゃんとお金を払って下宿させているのだから、それ相応の食事を期待しているわけである。

円も出して食べさせてもらうことはないと、どう考えても食事内容に比べて高すぎるし、バカらしくなってきた。その上、野菜とか果物が不足するので自分で買って補給しなければならないいし、土、日は外食しなければならぬので、一ヶ月当りの出費も予想外に高くなり、調査に出かけたり、写真とか本を買ったりなどの出費を考えると先が心配になってきた。さらに初めの頃は夫婦も一緒に食事を囲んで話が出来たのが、別々になり、食後はそそくさと自室に引きあげるようになってしまった。と云うのは主人がお酒を飲み過ぎ、夫婦ゲンカのとばつちりを受けるのである。また、一週間はど旅行して留守にしても食費は少しも引いてくれないし、内容も悪くなるばかりで、夫婦の金もうけ主義が目についてくるようになるとスムーズな人間関係を保って行けなくなってしまうた。

食事はかりでなく、寒くなるにつれて暖房をも節約、部屋の中にラジエーターが通っているだけで、ストーブも何もない、セントラルヒーティングの元栓を切ってしまうと寒くて居れないのである。大体夕方六時頃から一〇時頃までかすかに暖房してくれるが、夜八時すぎになると冷え切つて毛布二〜三枚重ねても寒く、朝は全然暖房しないのもつと寒い。さらに困ることは土日、大学は休みなので部屋に居ることになるが、とても暖房なしでは寒くて本も読めないの、仕方なしに大学の図書館とか近くの商店街などで時間をつぶすことになる。

このように夜寒いのでせめて風呂に入つて暖まろうとしても浴槽の半分も行かないのに湯が無くなってしまい風邪を引きかねない、この湯が充分出ないのは皿洗機を使用した日は時にひどい、この皿洗機は非常に沢山の湯を使うからである。寒さがさらに厳しくなるにつれてこれは相当耐えられないことである。

この外にも、私の外出中には部屋に入ってきて、ベッドカバーが乱れているとか、窓のカーテンの開け方が不ぞろいであるとか云われると、少々ノイローゼ気味になり、アメリカ人家庭の悪いところだけ見せつけられるようだった。私の後に入つた日本人も同じようなトラブルで早々に出ていった話を聞くと、私ばかりの我がままでもないようであつた。全くアメリカ人は大阪人以上にがめつくつてうるさいと云うのが実感である。

私は再び宿さがしに、奔走しなければならなかつた。Phiel 教授には今さら別のところを探してくれとも頼めないの自分で解決しなければならぬ。連日住宅紹介コーナーの貼紙を見に行くとか新聞広告を探すのがなかなか思うようなところはないし、寒さが厳しくなつて行くにつれ焦燥を増してゆくばかり、この頃は学期中でもあり、学生が余り移動しないので住宅を探すには条件が悪すぎるのである。

やっと見つけたワンルームアパートへ引越し

11月も終りに近ずいた頃、近くに住むインドネシアの友人の紹介でアパートに移つたのであるが、今度は別の色々な困難にぶつかり悪戦苦闘することになる。しかし、前の下宿に懲りて、暖房が充分であること、自炊が可能、バスルーム付であること、大学に近いこと、余り高いことなどは良いが、最も困つたのは家具付でないことであつた。

このアパートはEfficiency Room or Studio Room とよばれているもので、八畳位の部屋が一つだけ、これにバスルームと洗面台のみ、それから簡単な台所がつく場合があるが、私の場合台所は隣室にあり共同で使うようになっていた。本来

は仕事室であつて家族が住むようになつていないが、單身者には安くて便利なのがよい。

隣室



アパートの契約

契約書は前の下宿と違って何枚かの書類があり、保証人二人、入居、退居時の手続、入居後の責任と義務など三〇項目位の書き込まれたのがノート二枚位、入居時のよこれ、破損、設備等のチェックリストと確認し退居時これを調べ補修代金を請求されることがある。このため入居時 Deposit と云う担保金を支払うこれは Security Deposit と Damage Deposit があり、前者は入居前の敷金のようなもの、入居後は後者になる場合が普通で、出るまで何もなければ返却してくれる。大体、五〇〜一〇〇ドルぐらい

が多いようである。

このアパートの場合、契約期間は最低三ヶ月でデポジット五〇ドル、部屋代の支払い方法は入居時このデポジットと部屋代二ヶ月分支払う。一ヶ月分は当月分、あとは最終月分であるが、この意味を間違ひして後で管理人とひと悶着起すことになる。と云うのは二ヶ月目の部屋代も払ったと安心していたら、ある日私の部屋のドアにメモがあり、「遅れた罰金六ドルと部屋代を早急に払いなさい」と云うのである。(支払いは月初めの五日まで、これを過ぎると罰金が払わされることは契約書に明記)、

私は全くあわててしまった、せっかく俟約して頑張っているのに六ドルの罰金は痛い。早速管理人のところに行きよく話を聞き、私の解釈が間違ひしていたことをあやまり、なんとか罰金を逃れることが出来たが、ここでも言葉のハンデと自力で解決しなければならぬ異国の地にある我が身をかみしめたものである。



バンガロイドスタイル

アパートの管理と防犯

管理人は若いカッブルで主人は大学院生、奥さんは働きに出ている。部屋代は半額全面的に免除されるが、入居者からの集金トラブル(騒音、故障掃除機の貸出など)の解決、連絡事項、さらには入居募集、事務手続などオーナーと入居者間の仕事はかなり忙しいようである。しかし学生同志のカップルなどアルバイトをかねてやっているものが多い。

防犯体勢はアパートの表入口のドアにリモコンで開けられるオートロックとなっており誰れでも自由に入れるようになっていない。住人はこの表ドアと自室ドア、地下共同洗濯室、裏側入口さらには郵便受のカギが渡され、まさに小さなアパートの一室に住むのに五

つのカギが必要なのである。特に表ドア、自室ドアはオートロックなのでちよつと手紙をポストに入れようと何気なくカギを持たずに外に出ると大変、不運にも管理人の帰りが遅いと厳寒の夜ふるえながら外で待たねばならないことになる。

表ドアの外側壁には入居者の室番号の入ったインターホンがあり、それぞれの室と外部と話が出来るので、訪ねてきた人はその室のブザーを押すと部屋の中のブザーが鳴り、インターホンで確かめてから室内の操作ボタンを押すと、表ドアの電流が数秒間切れるので、この一瞬をとらえてドアを押すのである。

この装置は他のどのアパートにもあり、一見防犯予防にも良いようであるが、誰れかが入るのを待つてドアを開けたと同時に一緒に入ることが出来るので余り頼りにならない。逆に時々私もカギを忘れた時この方法で入ることが出来た。また、やたらと間違ひベルを押されると迷惑で、深夜など寝ているのに起されることもある。

部屋のドアにはのぞき穴があるのであるが、これがまた困つたもので私の頭上はるか高いところについている。いくらアメリカ人でも二mもある人は

無かろうに、たとえ台にのぼつてのぞいても相手の顔など見えないであろう。



コロニアルリバイバルスタイル

家具なしアパートで奮戦苦闘

事前に承知していたものの、カーベットの敷かれ、何もない部屋に移つてみると、日本のタタミ部屋のわけには行かないのである。窓は床から一m高さ位のところに一つだけあり、直接床に腰をおろすと穴ぐらに居るようで圧迫されそうである。

ベッド、ソファなど家具類はレンタル専門店があるのであるが、出費をこれ以上に増やすわけにはいかない。お金をかけないでなんとか家財用具をととのえられないものか、これを我が身でもって住宅研究者たるもの知恵をしぼるべき時なのである。

幸いなことに前の下宿のおじさんが

親切にもベビー用位の小さく薄い敷物を貸してくれていた。手足がはみ出るが何もないよりましである。毛布は近くに住む友人から一枚だけ貸りることが出来た。しかし一晩目は余りにも薄い敷物を通してコンクリート床の固さ冷気と慣れないこともあつて殆んど寝れず夜が明けてしまった。暖房を最高にして寝たのどはカラカラ、部屋の空気は息苦しく不快そのものであった。

とにかく何とかしなければと色々考えたあげく、出来るだけ沢山の大きなダンボール箱を集めてくれることにした。薄ペラマットの下に何層か積み重ねることである。特にダンボールは中空なので断熱がよく、床から湿気も吸収してくれるはずである。何日か、かつて大学の食堂、食料品店などからわけを話して数個のダンボール箱を持ち帰り、つぶして敷物の下に重ねてみたが、固くて弾力性がなく余り期待したほどのものではなかったが前よりましであつた。

捨てる人あれば拾う者あり



新聞の販売ボックス

どは、なんとか我慢するとしても、中のスプリングの上端が所々飛び出しているのは少々危険である。とは云えダンボールに寸足らずのセンペイマットよりはるかにましである。そして引越す時はもと通りゴミ捨て場に返しておけばよいのがまことに都合がよい。

この濡れたマットを外に干すわけには行かないので、室内の暖房を一日中最高にし、ラジエーターの上部に立てかけて一部ずつ乾かすことにしたが、日中は閉めきつて外出するので帰つてみるとマットからの蒸気が充満し、むしろプロのようであつた。

やっとマットレスも乾き、飛び出していたスプリングの上端は新聞紙を折りたたんで押え、表皮でかくし、シートとカバーだけは新しく買求めなんとか安眠できるようになった。

しかし毛布はいつまでも借りているわけに行かないので、どうにかしなればならない。どこが安い色々と友人などに聞いた所、中古品だとガレージセール、教会主催のバザー、あるいは Army Store と呼ばれるアメリカ軍払下げの中古品専門店を教えてください。学生達（一般市民も含めて）は徹底して中古品をうまく、しかも安く利用している。特にガレージセール

大学の講義の始まる前に近くの友人の助けをかりてやつと自室に確保することが出来た。しかしいぎ手もと近くみると誰かが捨てただけあつてひどいものである。表布の汚れたあとの地図な

は盛んで、週末に土、日は新聞の広告を前もってメモしておき、十数ヶ所を車で廻る市民も多い。また年末になると教会主催のバザーがあちこちで開かれ、かなり大規模で品物の種類も多い。

軍の払下げ店は、中古品とともに新品も売っている。シアトル市の中心部近くにあるこの種類の店は軍関係の外、中古品とか廃品を再生し、福祉対策の一つとしても相当大規模な売場を持ち、まさに大中古品再生センターである。ここで私は毛布より寝袋にしようか迷った末キルティングのベッドカバーといくらかの 食器類を買った。

これらの他に机、イス、スタンド、自炊のためのナベ類が必要であったが幸いなことに日本人留学生、教会で親しくなったアメリカ人女性のおかげで借りることが出来た。

最後にテレビかラジオの必要性である、ただでさえ孤独になりがちなアパートである。やはり中古品で良いのであるのが欲しい。それには大学の情報交換コーナーが、落し物、忘れ物払下げコーナーを利用することであった。これらは学生会館の中にあり、前者は各自勝手に売りたいもの、買いたいものなどノートの切れはしなどのメモ書きから色付マンガ入りポスターなど何でも

ピンで止めておくのである。教科書類から電気製品はもちろん、家まで何でも出ている。後者の払下げコーナーは一定期保存した後売りに出される。穴のあいた衣類、使ったノート、指先の破れた手ぶくろ、時計類、汗臭い靴下など何でもござれである。ここで私は枠の曲がった小型ラジオを買い急場をしのぐことが出来た。

このようにして一年間はあつと云う間に過ぎたのであるが、アメリカと云う広大で資源豊かな間の実際の庶民生活に触れながら、思っていたより儉約家だめつく、中古品を何回でも利用し、形式的、無駄なことにお金をかけないが生活を楽しめる空間への努力と人生を豊かにする面ではケチらないアメリカ人的気質から大いに学ぶべきところがあった。



クラシックボックススタイル

おわりに

昭和五年八月二五日は私の〇〇回目の誕生日である。奇しくもこの日一年ぶりに日本へ帰る途中の最後の訪問地モスクワ空港を飛び立とうとしていた。飛行機の中から長旅を無事に終えたと云うホッとしたような、何かやり残したような、忘れ物をしたような複雑な気持で夕やみ迫る外をながめていた。

日本語の新聞に目を通すと広島カープが圧倒的に強く、すでにマジックナンバーが出たと報じられていた。私もいつの間にかカープファンになっていたようである。

過去のことは思い出し後悔したくないと否定しながらも、余りにも多くのことに出会い、なぜか苦しかったこと



テューダースタイル

の方が強すぎて仕方がない。当初の不安とあせりはまだ消えていないし、帰国後も違った意味でもっと大きくなるかもしれない。しかし、個人主義の徹底したアメリカ社会で自分を見つめ、もがいてきた試練と自分の目で確かめた体験は教育の場、研究のとりくみ方、さらに私自身のこれからの人生にとっても、貴重な一ページであったと回想しながらアメリカ生活奮戦記のつづりを閉じることにします。

今回は大学での講義、研究調査など研究面のことは省いて、もっぱら下宿さがし、家具なしアパートでのトラブルを中心に書いたものです。もちろん大学では関連講義、ゼミナール、住宅調査、図書館での資料収集など忙しさに追われながらの生活奮戦であったことを付け加えておきます。

80 12・20

西川 加瀬 記

五三会によせて

(工大会計課)
寺本 和子

五三会の皆様こんにちわ おはえて
いて下さいますか?私を。

今は大学会計課で、ひっそりと授業料
徴収、追再試験料徴収くらいでしか、
お目にかかれませんが、五三会創立の
頃は、学生部で窓を背に掛けていた者
です。会誌編集の保井英三様から「学
園譜」にもならない想い出を、と寄稿
のご案内を受け、光栄なことと感謝し
ながらもとまどいながらペンを執りま
した。

五三会、よい名前をつけたものです
ね「五三会」当をえて妙を得たりとい
う感じがします。一寸違えば、七五三
子供の成長の行事となり、嘘三五八と
狂ってしまいます。建築学科の会を結
成しようとしていた頃、草稿を見せて
いただく機会がありました。学生さん
らの意図となかなかみあう点が一致
せず、学科の先生方によく相談して、

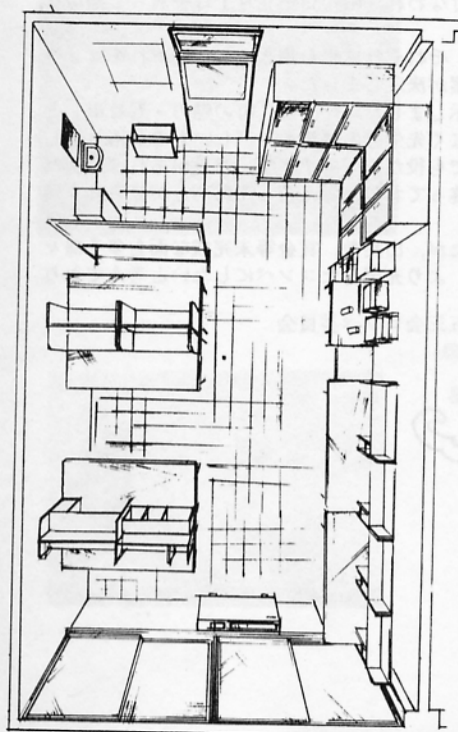
結成願を出すべきでしょうと申し上げ
ましたところ、その時の学生さんの中
には、私の「例えば……」とか「解釈
の仕方によっては……」「受けとめ方
では……」と云うのが通じなくて、一

言一句メモをとりながら、私と話をな
さるのには、疲れてしまいました。で
も五三会にも想い出を残してくれる人
々がありました。庭園学を講じる先生
の研究室に畳が二枚敷いてありました。
そして手造りの柄杓・茶杓でお薄をた
てて下さりながら、ご高説を拝聴させ
ていただいたこともありました。この
先生は、工大を退かれ、東京にお帰り
になることとなりましたが、駅頭で見
送られると涙がとまらなくなるので恥
しいとおっしゃって、広島をお発ちの
日をおっしゃいません。ようやく聞き
出したご出発の日。それでもご乗車の
列車は秘でした。今と違って新幹線
は東京ー岡山間の開通でしたから、東
京への特急は数が知れていたとはいえ、
ご出発の日、広島駅の改札口で先生の
姿を求めた学生がおりました。何とし
てもお見送りするのだとがんばったよ
うです。そして充分にお世話をし、お
送りしたとか。今の新幹線の時代だっ

つたら、この先生と学生の話は形をど
う変えているでしょうか。



*** ゼミナール紹介 ***



佐藤立美研究室

光弾性実験班

東 善久, 石田 智則

コンクリート実験班

楠本 夏実, 仁後 利孝, 宮本 修, 矢口 卓郎

耐震診断班

塩崎 武, 植 康晴, 森田 文孝, 藤井 利昌,
日出谷 芳文

○テーマ

「光弾性実験による壁式架構の研究」 光弾性実験班

「丸柱のフープ形状の違いによる実験的研究」

コンクリート実験班

「広島県内の既存 R C 造建物の耐震性能診断」

耐震診断班

○工程表

例 コンクリート班

4～6月	実験計画
7月	試験体作製及び実験準備
8月	実験
9月	データー整理
10月	解析
11～12月	卒業論文作成
1月	卒業論文修整

○抱負 中空スラブの研究

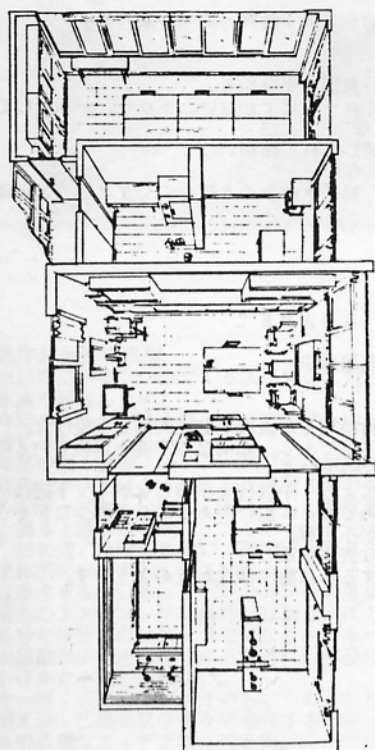
○大学に対して

沼田のテニスコート代を学生にはタダで開放すべきではないか。

図書館の書物をふやすべきだ。

○卒業生に対して

暇な時に ゼミ室に来てくれる事を望みます。



浅野良晴研究室

水使用分析班

森川嘉寛, 深津信治

太陽熱班

谷本和典, 筑本浩行, 沢井勇二

器具解析班

橋谷吉教, 久保義晴

雨水利用班

森永伸彦, 山田雅明

給排水実験班

入野亮久, 梶原範雄

テーマ

“広島県における水需要および水使用構造分析”
—五日市町の場合—

“広島における太陽熱利用に関する基礎的研究”

“モンテカルロ法による器具使用シミュレーション解析”

“建築における雨水利用に関する基礎的研究”

“大便器の動的応答特性に関する基礎的研究”

抱負

研究以外では、マラソン等のスポーツによって、精神力および体力の強化を図るとともに、ゼミ内で色々な行事を設けることによって和を深める。

大学に対して

- ・金もうけでなく、本当の意味で大学の為になるようにアカデミックな雰囲気づくりには積極的協力すべきだ。
- ・図書館の本が少ない。

第6回五三会コンペ入選発表

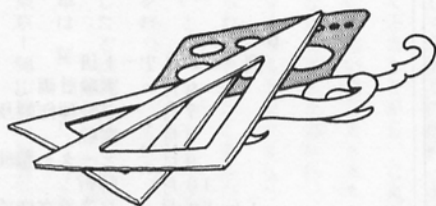
第6回五三会コンペは課題「町の魅力・五日市」のもとで行なわれ、昭和55年9月1日をもって締切り、在学生から5点の応募作品がありました。

審査は広島工業大学建築学科諸先生に順位をつけてもらい、それぞれ感想も頂きました。それをコンペ委員会で集計し厳正な審査の結果次記のとおり入選案、佳作案が決定しました。

表彰式は、11月3日大学祭に於いて行なわれ、全作品も展示しました。今回の「町の魅力・五日市」というテーマは、抽象的でむずかしかったせいか応募作品も少なく先生方の感想もきびしいものがありました。また、このコンペが工大に在る五日市にとって少しでも役だつ、アイデア、意見があれば成功だと思っていたのですが、どの作品も“発想”“構想”の段階で終わっており、考え苦しんだあとが見られず残念です。

この“五三会コンペ”は第6回をかぞえるようになりましたが、出品数、賞金等未完成な面も多く様々な問題があります。今後も皆様の御意見をお聞かせいただき、より充実したコンペにしたいと考えております。

五三会コンペ委員会



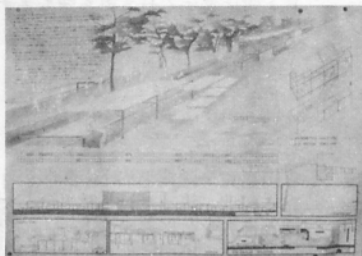
一等該当者なし

二等作品 “松の道”

入船白弘、徳永一英、薬師寺博元、鷹村暢子

審査員感想

1. 表現が素直で設計意図も充分判る。
2. 空間演出に対してユートピアがない。デッサンが不足している。
3. 非常に現実性を感じられて面白い。
4. 場所が良くわからない。
楽しい風景だが“松並木は歩くと痛むのでダメだ”と町の人
がいつてました。

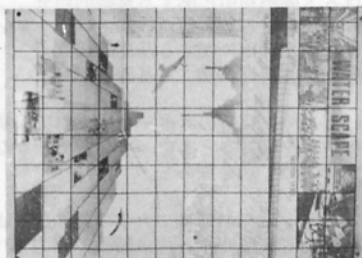


三等作品 “WATER SCAPE”

久保恭一、有尾有夫

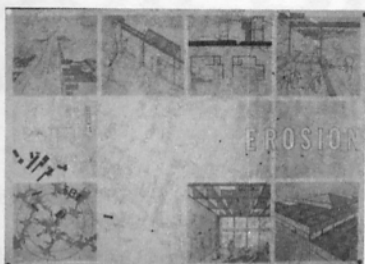
審査員感想

1. 本作品の設計主旨は判るが表現が貼絵的印象を受けた。
2. 発想に対し表現不足である。如何なる空間を求めているのか平面的な遊びになつている。
3. 正方形グリッドにより、中性代を示唆しながら、下図はパースペクティブであることに狙いがあるのかと思つたがそうでもなさそうなのが不可解。
4. もう少し具体的な表現が欲しい。
5. この計画が実現するには海洋浄化が先のようなのです。



佳作作品 “ EROSION ”

審査員感想 伊藤貞二, 下岡秀樹, 谷重義行



1. 設計の意図が判然としなが表現方法に工夫の跡が見られた事を評価する。今一步。
2. 1 2 の区割に分割されて, それぞれのつながりが無い。目標は何か分裂症状を生じている。
3. 何のこやら, さっぱりわからない。

佳作作品 “ コミュニティーカレッジ ”

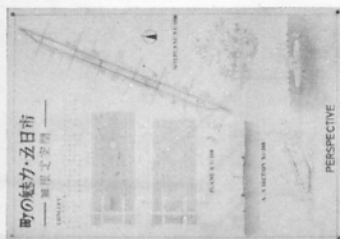
審査員感想 落合木堂, 山本高司



1. 設計意図はある程度判るが, 表現が今一步である。
2. 写真で示した空間と計画空間にずれがある。計画の貧困さがめだつ。
3. 各カットに説明が欲しい。
4. 場所良くわからない。

佳作作品 “ 無限定空間 ”

審査員感想 日高俊二



1. 産業道路を単に歩行者天国的にとらえ, 図面も今一步。
2. 空間演出に対してユートピアがない。デッサンが不足している。
3. 構想の主旨が少し説明不足。
4. 場所全然わからない!!

出品作品全体の感想

1. 出品作品が少ないので, 5 人の努力に対し, 順位を付けるのは酷な気がします。出品するという 5 人の意気込みを高く評価します。
今回のテーマを A1 版 1 枚に表現する事は困難だとは思いますが, 折角のアイデアを充分表す事が出来なかつた様に感じました。
2. 建築設計 (計画) のコンペにしては計画そのもので人に話しかけ, 何ものかが不足である。
建築はコンペはグラフィックデザインのコンペではない。空間を説明するものにかけている。
3. このテーマからいって, もう少し図面枚数が必要だと思う。そうすれば表現に幅が出ると同時に, 力の差もハッキリと出ると思うのだが・・・このような図面にしては賞金が高すぎる。
4. “松の道” の作品を除いて説明不足が甚だしい。
5. 全体的にポスター, あるいはパッチワークのような印象で “迫力” あるいは “すごみ” に欠ける。賞金総額 20 万円は多すぎる。しかし, 五三会コンペの重要性和努力は維持して下さい。
最近の工大のコンペ応募作品は観る人にとって説明が不親切すぎる。
自分だけ分るのはコンペではなくエスキースにすぎない。
6. 出品数の少なさとともにそれぞれの作品のレベルの低さにおどろいている。賞又は賞金に値するにたるエネルギーのかけかたを感じられない。
今一度, 五三会コンペそのもののありかたを再検討されたい。
例えば, 広島地区学生を対象にするとか, デザインコンペにとどまらず, 現場, 設計事務所活躍している卒業生からの多様なアイデアコンペとか。

第七回五三会競技設計案内

課題 町の魅力・五日市

「五日市駅北口広場と街路」

駅前にはまちの顔といわれている。80年代、地方の時代を迎えながらも、私達の目にとまる多くの地方都市は旧市街地、とりわけ駅前に多くの問題をかかえ、その再開発に苦慮している。

今回は魅力あるまちづくりとしての前回の課題をより具体的に駅前再開発にしほり、工大が位置する五日市町の顔、五日市駅北口広場と駅前街路を整備した案を募集する。

単なる基盤整備にとどまらず、ターミナルとしての機能をふまえた上での有機的な駅前空間（駅舎、広場、ショッピングモール、公園・・・）の創造を期待する。

所要図面 A1, 2枚以内に位置図、平面図、立面図、断面図、模型写真、パース、スケッチ等設計意図を説明するために必要な図面を各自選択して描くこと。

しかし、説明は必ず記入すること。

表現 自由とする。

応募記載事項 作品の裏面に応募者の住所、氏名、電話番号を記入すること。

応募締切 昭和56年9月16日（水）正午
（郵送の場合は9月16日の消印を有効とする。）

提出先 738 広島県佐伯郡五日市町三宅
広島工業大学建築学科事務室

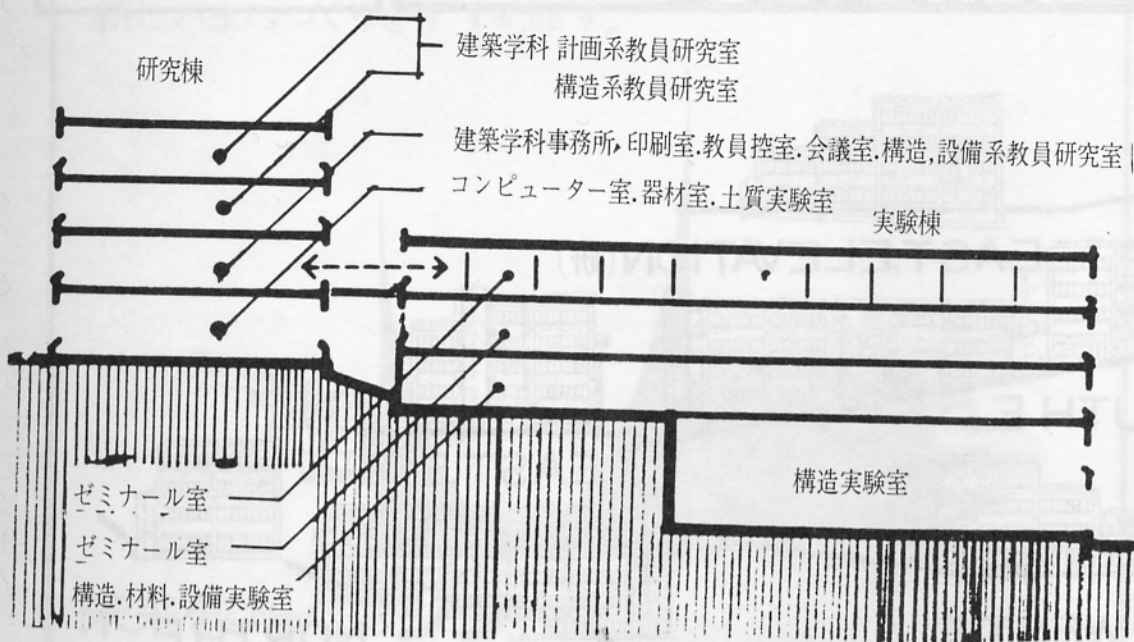
応募資格 広島工業大学建築学科学生、卒業生、教職員

入選発表 大学祭にて発表、展示。

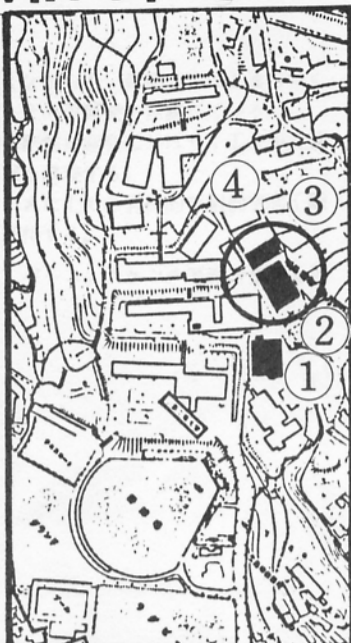
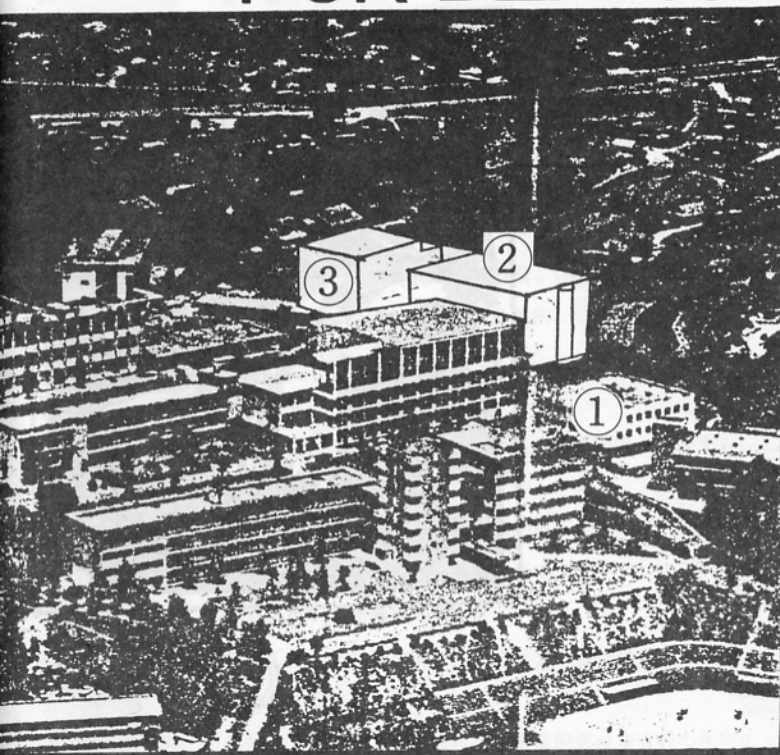
入選賞金 総額20万円（入選点数および賞金配布は審査員の決定による。）

審査員 5月末日ポスターにて発表予定。

BUILDING ARCHITECTURE



81 THE NEW FOR DEPARTMENT OF



- ①新2号館 ②実験棟
③研究棟 ④新機械科館



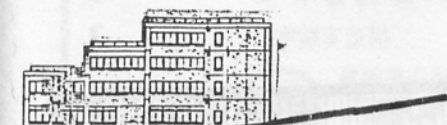
EAST.ELEVATION(研)



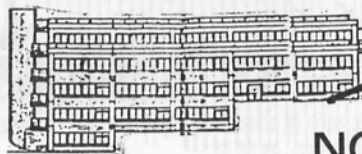
SOUTH.E



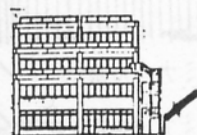
EAST.E(実)



WEST.E



NORTH.E





曾根田 彰教授退職記念講演



昭和五十三年三月二十九日午後四時三十分。鶴学園広島校舎において広島工業大学主任教授・五三会名誉会長でいられた曾根田章先生の退職記念講演及びパーティーが、主催五三会。後援広島県建築士会・広島県設計事務所協会、により曾根田先生御夫婦をお招きして開かれました。会場には、県建築士会会長杉田三郎県設計事務所協会会長河内義就 鶴学園総長鶴裏他 二百名余り集まり、一時間三十分もかかった講演も、先生の時折ませられる冗談で短かく感じられ、またパーティーも非常に家庭的な雰囲気、夜遅くまで、名残のつかないものとなりました。当日会場に來られなかった方々に曾根田先生の広島工業大学教授最後の講演文を載せたいと思います。

「住宅問題と私との関わり合い」

(現広島工業大学名誉教授)

曾根田 彰

本日の私の話は建築学科同窓会の幹事諸君の膳立でありまして、私としては、卒業生の諸君を対象とするとはば一世代前の建築技術者の一人でありますので、困難の多かった戦前戦後の時代をどの様に生きて来たかと云う個人的な体験談が、何らかの御参考になればと云う、誠に俗っぽい話でありまして、決して「格調の高い講演会」と云う風には期待されません様に、始めに先づお断り申し上げます。

明治の末年に生まれて、大正、昭和と三代に亘り、間もなく四代にも足をかけることになりそうな七〇年に近い生涯には、随分いろいろの事が次々

と続いたものと、今更の様に感心するばかりであります。

明治二十七八年の日清戦役と三十七八年の日露戦役は知らないのですが、その後一〇年して又始まった日独戦争、つまり第一次大戦のとはつちりとして日本も中国の遼東半島に出兵し、その時多くの独逸の捕虜を宇品湾の中にある似島に収容していた時は、幼な心にも珍らしく聞いていた覚えがあります。

その次には、満州事変と続いて上海事変が起つたのがはば一〇年後で、私は高校時代で大変なショックを受けた記憶がありますが、これが因縁となって遂に、米國と戦端を開いたのが、奇妙にもまた一〇年後でありました。この様に一〇年毎にいつも多くの國民の血を流さずには居られなかった日本民族の、奇妙なバイオリズムとも云うべき過去の歴史を振り返って見ると、その後に続いた三十五年間の平和が、不思議にさえ思えるのであります。諸君は幸いにもこの永い平和の間に生れて育つた事の運の良さに感謝しなければならぬと思います。

所でこの日米戦争では始めて日本の國土が襲撃を受けて、今までにない程に、銃後の國民の犠牲も多く、また今

日に至るまで大変な住宅難に苦しむ破目になった次第でありまして、我々建築技術者としても大きな責任を負い続けて来た時代であつたと考えております。

尤もその前にも住宅問題が、始めて国家的に取り上げられたのは大正十二年九月の関東大震災の後であります。(私は小学校六年生の頃)勿論この時は全国的規模であつた訳ではなく、単に関東地方だけの、いわば局部的な災害ではありましたが、それが首都東京と京浜地帯と云うわが國の心臓部とも云うべき所が、壊滅的な打撃を受けた事でありますから、大勢の被災者はそれぞれ地方に疎開し、また各地方からは救援物資や義捐金を集めて送られたと云う非常時態勢でありました。そして一番緊急を要したのは何と云つても震災で失つた四万戸の住宅の復興であつた訳です。それで全國から寄せられた救援金の中から、確か当時の金で一千万円だったと思いますがそれを基金にして財団法人「同潤会」と云うものが設立せられたのであります。そして東京・横浜地区に木造の長屋建の住宅とRC造の三階建アパートを建設して賃貸住宅の経営を続け、後には次第に一戸建の分譲団地にも手を拡げて行つ

て、その後十数年間に亘り住宅供給の旗頭として活躍した団体であります。

殊にわが国にR・C・アパートを造ったのは恐らくこの時が最初であつたろうと思います。このアパートが当時は文化住宅としてではやされたもので、

渋谷の近くの「代官山アパート」は二戸建を二層に重ねた今日で云う、準接地型住宅と云うべきものでありまた、

小高い丘陵性の樹木の間に散在している誠に良い環境の団地でしたし、又明治神宮の表参道に面して「青山アパート」は、後に私が最後の東京住い時空襲の為に丸焼けになった恨めしい所です。今日では若い人達のファッション・ショップで賑わっている原宿通り続き

になって、五〇何年の耐朽力をもつて今日でもまだお役に立っております。所で、この財団法人「同潤会」は日米の戦雲が緊迫した昭和十六年五月に「日本住宅営団」として発展的解消することになります。その「住宅営団」になる一年前から私はこの「同潤会」で働くことになった訳ですが、その話の前に、も一つ「同潤会」が建てた最後の、そして最も現代的なと称讃された「江戸川アパート」に、大学の三年生の時に入居させて貰つて、その後二年間余り大いに楽しい生活をエンジョイ

した思い出話をしておきたいと思ひます。国電の「飯田橋」駅から歩いて七八分位の距離の江戸川橋の近くに、

六階建と四階建の二棟で、広い中庭を囲い込んだ近代的アパートが竣工して新聞等にも書き立てられたものであります。二戸宛が利用する形通りのものですが、

六階棟の上部二層は中所下式の独身者用でした。戸数は世帯向け一二〇戸、独身用一二〇室であつて、独身階には

勿論玄関からエレベーターがあり、その入口のホールに隣接して一階が食堂、二階が娯楽室と云う低層部分が付属し、その地階には公衆浴場が設けられて

ると云う至れり尽せりの設計でした。娯楽室はかなり広いサロン風な仕構えになっていて、時々ダンス・パーティを開いたりしましたし、和室部分は

十二畳位の広さで、囲碁、将等が備えつけられていて独身者が最もよく利用した所であります。とにかくこれま

でのどのアパートよりも新式であつたのですが、既に当時の資材の逼迫した時代では、これが最後のアパートになったのも止むを得ないことであつたと思ひます。独身室は、六畳八畳位さ

まざまあつて、ベッドと、作り付けの洋服ダンス、それに内法の上に大きな押入れがあつて充分余裕がありました。それに電話交換室の親ラジオから各室に配線してスピーカーが備え付けられ、朝の放送開始時間には自動的にスイッチがはいり、終了と同時に、元のスイッチが切られる仕掛けですから目覚時計の代用には持つて来いという訳です。また全館がスチーム暖房完備でありましたので、その年度も終りの頃の卒業論文の仕上げの頃は三人のグループが集つては分担の清書等に夜を更かししておりました。火鉢一つの下宿の部屋よりははるかに能率が上つたからです。その作業も殆ど終り頃のある夜、東京では見てなかつた程の大雪が積もり、電車もタクシースべてストップしてしまつたので、皆で肩を寄せ合せて雑魚寝をした訳ですが翌朝、例の二・二六事件が突発したのであります。これは支那事変が次第にエスカレートして、軍部の独走が激しくなつた頃で、第一師団の若手将校達が蜂起して、温健な政の閣僚や警視總監等を次々と暗殺し、宮城の周辺を固めて立てこもつた事件であります。昭和十一年の二月二十六日のこの日は夜明け頃からラジオは盛んに市民に呼びかけて外出を止め、又、銃声が聞えたら壁の反対側

に身を伏せろとか、とにかく物々しい放送の連続でありました。

しかし午後になって状況がやや落付いた様子なので偵察に行く事にしたのですが、乗物は雪と動乱との両方で全面ストップしているので積つた雪を踏みながら先づ四谷見付から赤坂見付あたりのお濠端沿いに歩いて行くと、もう結構見物人がぞろぞろと続いています。しかし半荘門、桜田門等では、土囊を積んだ機関銃座が銃口をこちらに向けて構えているので、その正面あたりを通る間は聊か薄気味の悪い感じがしたものです。

こんな事件のあつた年の春、どうやら卒業証書は貰いましたが私としては三年間の在学ではどうも建築学を半分位しか教わらなかつた様な不安が心のしこりになって、とてもこれで社会に出る勇氣がなかつたのです。それは当時の東大では在学中に現場実習に出る事を極力忌避していたからであります。現場の仕事のルーズさを知ることによつて、細密な構造計算の勉強を軽んじるからと云う理由の様でした。しかしそれは学者の卵を養成するだけなら尤なことかも知れないが、私は学者になろう等とは毛頭考へた事もなかつたので、四月早々からある大きな鉄骨鉄筋

ビルの現場の監督見習として勤めさせて貰うことにした訳です。その時は丁度基礎工事が始ったばかりであったので、それから一年半の間、毎日汗を流すことになったのですが、しかしこの経験は、その後の建築関係の様々な立場で仕事をする上に大いに心強く、又役に立ったと思っています。

そしてこの工事の竣工間近かな折ではありましたが大阪市の電気局に居た先輩の招きに応じて住み馴れた東京から関西下りをして暫くは大阪住いとなりました。この電気局と云うのは、今の交通局に相当する大きな外局であつて、現在の市電、市バス、地下鉄等の交通部門に加えて、その当時は大阪市が市民への電力供給も行っていたので、発電所や変電所をもつ電気事業部門との両方を含んでいたのであります。

赴任したら早速の仕事が変電所の構造計算であつて私の最も不得意であつた構造屋にされてしまいました。変電所となると、当然すべて電気屋さんの下請の立場になる訳ですが、一番憚いたのは、建物の各部の寸法が総て単位で示される事でありました。これには設計の立場以上に現場係りが大いに泣かされていた様です。

しかし昭和十四、五年頃になると日

米関係が險惡となつて、国内の重要施設の防空対策が緊急に進められると云う情勢であり、取り敢えず新設の地下鉄用の変電所を耐弾構造で設計しろと云う難題を仰せつかった訳であります。

当時のアメリカの艦載機からの爆撃では二五〇kg爆弾が最大限である事と、それが投下された場合の爆発力等のデータは既に軍部の方から得られていた

ので、それに耐え得る屋根スラブの計算から先づ入つて行つた訳です。所がそれが厚さ三〇cmのスラブに、二五mmの鉄筋を上下ダブルに組む必要があると云う物々しい結果になるのです。しかも一階は普通の階高の整流機室ですから良いのですが、二階はその倍の階高の変電室で、その上にスパンも中柱を一直列抜いて一五・六m位の長い梁となる特殊な空間を要求されているのです。従つてこの重いスラブを支える為の梁と柱は恐らく想像を絶する程の大きさになりそうで頭を痛めている時に、ふと閃いたのが、スラブと壁が三〇cmと云う厚さである事と思い合わせて、T型梁、T型柱の考え方に気がついて手元の「設計基準書」を繰って見たのですが、そのモデルとは桁が違い過ぎるので、当時のR・C構造の権威者であつたドイツの学者（名前は失念）の

本を探してこれを頼りに何とか計算をして見た所、その結果は今度は予想より遥かに少い鉄筋で済む事になったので却つて又不安になった次第です。先輩に相談した所、これまで余り例の無い構造なので判断に困つた様でした。

当時の建築行政は警察部に所屬していたのですが、大阪府警察部の構造専門の係長は極めて鋭い技師だと云う定評のある人でしたので、その人が認めてくれたら大丈夫だろうと云うので私は計算書等を持って行つて、初対面のその技師に説明したら案外簡単にOKを貰えたので拍子抜けがしました。残念ながらこの工事がコンクリート打ちを終わらない内に私は大阪を離れることになったのです。その後、どんなに仕上つたのか、或は戦災を受けたのかどうかを、戦後に是非一目見に行きたいと思ひながらも、天王寺駅の少し南の方までわざわざ立ち寄るチャンスはとうとう得られないままであります。この設計が最後で「鉄材使用統制」が始まつて、軍需工場以外には配給が打ち切られることになつて私達の仕事はなくなつてしまいました。

しかし、その一方では全国的に軍需工場の建設が盛になると共に、これに必要な多くの工員を地方から集める

為には先づ住宅の建設が急がれると云う新しい情勢が大きな国策として現われて来た訳であります。

その構想は「住宅営団」と云う政府の代行機関を設立して、仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡の重点工業地帯にそれぞれ支所を設けて、五年間に三〇万戸の住宅を建設すると云う大計画でありました。それにはこれまで長い間住宅建設に経験が深い「同潤会」を母体として組織造りをするのが一番早いと云う事になったので建築技術者が続々と同潤会に集り始めておりました。いづこも同じく資材統制の為に仕事が無くなり出したせいでしよう。私も決心して僅か二年半の大阪住いに別れを告げて、上京し、始めに話した青山アパートに世帯道具を運び込んだのは、昭和十五年の初夏で、表参道の櫛並木がさわやかな風になびき、当時既に二〇年前に建てられた古めかしいアパートの壁には蔓が青々と茂つていた姿を今も思い泛べます。

同潤会の事務所は、「虎の門」の文部省前を少し東に入つた所で日比谷公園にも程近い所にありましたが、比処に「住宅営団設立事務所」の看板が掲げられ、また一方では同潤会としての軍需工場の為の住宅団地建設が、大車

輪で続けられていたのであります。私も早速、名古屋にある「住友金属」や「住友プロペラ」等の軍需工場の独身宿舍の仕事を興えられて何回か名古屋に往復したのを隠い出します。勿論これらは総て木造でありまして、コンクリート打などと呑気な仕事をやっては居られなかつた事と、既に鉄筋も住宅に使える様な情勢ではなかつたからです。

翌十六年五月にいいよ「住宅営団」が発足し私達若い技術屋は殆ど東京支所勤務となつて関東一帯が業務範囲となつた訳です。虎の門の元同潤会の建物はそのまま本部として残りましたが、その頃には本部の研究部のスタッフとして以前から住宅問題を専門としておられた京大の西山卯三先生や、市浦健さん等と云う名の通つた人々が集つておられて、私達もよく「住み方調査」等のお手伝いをして大いに勉強させられました。

東京支所は大手町のお濠端近くのビルに引越して先づ始つたのが敷地探しからであります。初代の支所長は東京府知事を勇退された方で、背の高い細身の方でありましたが、いつも卒先して用地課長（老人）と、そして我々若い技師一人づつを交代につれて一日中、

東京市の郊外を歩き廻られるのが日課の様でした。当時は今日とは違つて土地ブーム等ではありませんし、殊に準戦時態勢と云う社会的なふん囲気が充満していた頃なので、土地の値段の折合い等と云う問題はありませんでした。が、それでもそれぞれの工場への通勤の便を第一とすること、建設の効率を上げる為に出来るだけ大きな敷地を確保するにはやはり、帯に短し褌に長しと云う様な事で丸一日埃りつぱい炎天下を歩き廻わる事になります。そば屋でもあれば其処で腹を満たしてまた歩くと云う有様で、我々とはともかくとして、東京府の知事であつた人が車も使えない時世で誠に気の毒な程でありました。時には冗談まじりに「毎日そばだけでは体が持たないね」と苦笑しておられました。とうとう二年足らずで病に仆れてしまわれたのは時代の犠牲とは云えお気の毒に堪えなかつた事です。

この様な努力を続けながら遂に昭和二〇年を迎えた訳ですが、南方の島々が次々と敵に奪還されてからは本格的な大空襲が続きました。この手始めは三月十日に東京・大阪が殆ど同時であつた様に記憶しますが、東京では海抜〇米地帯と呼ばれている下町の江東又

一帯が完全に丸焼けとなり、約二〇万人の焼死者が出た直後でしたが早くも工場の再建と平行して工員宿舍を建てる計画が始まり、暫くの間現場に通勤した事があります。その時はまだ都心から山手にかけては爆撃も部分的で大きな損害も目に見えなかつた程ですが、日本橋を出はづれると遥か東の方向は目に見える限りの焼野原で、耐火構造らしい物の焼け残りは殆ど目につかない位の感じでありました。勿論もう焼跡に住んでいる人も居ないので交通機関もなく、私の住む青山方面からは自転車を通うしかありません。地図の上で側つて見ると、直線距離で十二km位ですから当時の道のりは二〇軒位はあったと思われまふ。山手から日比谷あたり迄は主に下りで、それから先は平地の連続ですから往きは楽ですが、帰りが大変でした。荒川放水路に近い現場では主に刑務所から連れて来た受刑者を使つて焼跡の整理から始まつていましたが、中にはどぶ川から水ぶくれになつた死体を引き上げたりしている光景もありました。水ぶくれと云えば連想するのですが、そこで働いている受刑者は皆一様によく肥えて栄養たつぷりと云う体付きで、我々は毎日ひもじい思いをしている側から見ると誠に羨

ましい感じでした。夕方になると彼等の一斉に輸送車で引上げた後、私は唯一人で焼野原の中の道をペダルを踏んで帰る時、人一人も見えない焼野原の夕暮れ道は、何とも云えない程静寂で、物淋しい景色であつた事を深く印象づけられています。時々近くの焼跡から突然「ガランガラン」と焼トタンが動く音がする度にドキッとして、振り向くと風のいたずらであつたりして、漸く人形町のあたりの焼止まりの家並みが見え始める迄に三〇分位かかった様な気がします。

その中、山手方面にも空襲が盛んになつてきて、防禦体制として防火線の空地を造るために「建物疎開作業」にも狩り出され、大学生を主とした作業隊の小隊長格で私達は渋谷付近の地区を割り当てられて何百戸かの勿体ない様な家まで引き倒したのですが、これももう手遅れで、空からはよくピラが撒かれて、また「東京市内のトナリは間もなく綺麗に仕上げに参上致します」とからかわれたりして。

これがいよいよ実行されたのは忘れもしない五月下旬の最後の大空襲でした。東京の町があらかた仕上りを完了した形になったのはこの時であります。

私共の住んでいた青山アパートは、前に述べた通り巾六〇米の神宮参道に面し、向いは概して大きな屋敷町で、広大な庭園の中に建物が散在している感じの所でしたので、此処だけは大丈夫と云う安心感があつたのです。私はたまたまその晩は一時預つていた親類の小学生を疎開先に見送る為に上野駅まで行つた帰りで、山手線の原宿駅に下りた所で無気味な空襲警報が鳴り響き、二〇〇米位の並木道を走つて帰つたのですが、アパートの前まで帰り付いた時、早くも焼夷弾がバラバラと降つて来て、並木の枝まで跳ね上つて火を吹いているのが丁度クリスマスツリーを連想した事を覚えています。あわてて建物に飛び込んで皆が地下室に避難したのですが、何回も繰り返される焼夷弾の投下される音は、丁度建築現場で鉄板の上で手練りコンクリートを煉る際に、バラスをぶち撒ける時の鉄板の真下にしゃがんでいる程の大きな音だと思いました。屋根のスラブはさすがに貫通はしませんでした、事前の予想が裏切られた事は、六〇米巾の大通りも、風のある時の火事には延焼を防げないと云う事実でした。向いの邸宅が皆大きいせい、その焔がこの距離に拘らず延びて来て、その焔

の尖端が当つた窓からは訳なく火が燃え移るのです。後から分つた事ですが、その焔の数が少なくて間隙が割に広がつただけに焔の当つた二・三戸宛は焼けても外づれた部屋は助かつたと云う斑焼きの状態に止まつた事は、せめてもの救いと言ふべきでしょう。

朝になつて見ると表参道の樺並木の根元に群がった沢山の避難者の黒焼死体がどろどろと重なり合っていました、この団地の一三〇戸の住人には一人の死者も出なかつたことは、せめてもの幸いであつたと思います。翌日は火の粉で焼けた眼が明けていられなくて丸一日寝て冷やしておりましたが、次の日からは、ぼつぼつと我が家の中の焼跡をかき廻してはいろいろ貴重な不燃物を堀り出したりして数日を過ごして居た時、徴兵免除であつた私にも赤紙が届けられました。最後の「根こそぎ動員」と云うのであります。もう東京には何の未練もなく、リュックサック一つ背負つて一度広島に立ち寄り、山口の連隊に入隊した訳です。一ヶ月ばかりの初歩訓練を受けた後に南九州の敵の上陸予定地と目されていた志布志湾の防禦隊に加えられて毎日機関銃の陣地構築の重労働でした。三十五才の二等兵でしたが、光輝ある帝国陸軍

の最後を見届ける事が出来たのも今となれば貴重な体験であつたと思つています。終戦を迎えても除隊されたのは十月の初旬で、始めて広島が無残な姿を見せられた訳です。田舎に帰つて見ますと九月の颱風で家も一部壊れたりしてしまつたので、その復旧を手伝い暮近い頃再び上京して営団に復帰しましたが、弟も既に戦死してしまつたし、残された老父母の希望もあつて私は広島支所への配置転換を願つて漸く翌年六月に広島に帰りました。

当時の広島支所としても、家を失つた大勢の人の為にとりあえず応急簡易住宅を建てることに追われていました。今の基町の高層団地や球場あたりの一帯が元の第五師団の兵営と練兵場であつた所に、一戸当二〇坪足らずの長屋を建て並べる仕事でありました。戦時中から引続く資材の不足、殊に木材が主要材料であるので、これの調達が最重点であつた訳です。広島付近の元の日本軍用施設は総て占領軍（英濠軍）が押えていて戦後処理に當つて居たが、その一つとして宇品湾の似島の元陸軍火薬倉庫では弾薬の処理班が西側の那沙美島に運んで焼却作業を行っていました。その結果空いた倉庫の木材の転用に眼をつけて、それを貰い受けて

行くのが私の最初の仕事でありました。

私は赴任早々で支所の仕事については未だ何にも話を聞いても居ない段階であったのですが、支所長の言葉によると「占領軍の司令部は呉にあるが、その“BCOF”にはもう了承を得ているので似島の部隊長にその事を話して、解体作業や輸送の為に行く日時等を打合せて来てくれ」との事でありました。私は単身で、敵地に乗り込む様な気持でその部隊屯所を訪れ、キヤップと覚しき濠州兵の将校にその由を覚束ない英語で話したのです。その時、彼は何故かニヤニヤ笑って聞いていましたが、案外簡単にOKをくれた訳です。帰って来て始めて判った事で

が、「BCOF」と云うのは「英連邦占領軍司令部」の略語であったのを私はつまりり人の名前だと思っていたので「MR・BCOF」がと云ったのがおかしかったのだらうと皆で大笑いになった事です。その他岩国基地に積み上げてあった日本軍の軍用資材を貰いに行ったりしたのを覚えていますが、その他の事は総てが目の廻る程忙がし

H Q（占領軍総司令部）の判断で解散を命ぜられた事である。戦時中に兵器生産工場の為に大いに協力した事は事実であります、住宅営団の六つの支所を合せて二千名以上の職員、勿ち

路頭に迷うことになるので、建設大臣を相手に職を与えよと云う斗争を起す事になった。私も東京に明るいからと云う事で中央斗争本部へ呼び戻されて組織部長と云う甚だ気の進まない役目を与えられました。他の各部長達（毎日建設省への懸け合いとか、GHQへの陳情、調停委員会への働きかけ等いろいろの役割りを分担して飛び廻る役目の方は一層大変だったと思います。）私の仕事は各地方の支部との連絡とデモ行進の企画等であつたと思いますが、営団本部のビルに立こもり、毎晩会議室でその日の報告会やら次の日の行動日程を決めるのに遅くなり、そのまま上階の畳敷きの部屋で雑魚寝をする。云う苦しい生活を約一ヶ月続けた訳であります。この頃は全国的に食糧斗争が盛り上り、各産業別の斗争本部が緊密な連絡体制を固めていて、一度メーデーまがいの“米よこせ大会”を宮城前広場で開いた時は参加者三〇万人と云われておりました。これだけ

て味わつたのですが、例えば自分達のグループが全群集のどんな位置に居るのかも見当が付かないし、いよいよデモ行進が各方面に別れて出発すると云う宣言がスピーカーから聞こえて一時

間経つてもまだ周囲の団体も動き始める気配がない。”先発隊はそろそろ帰って来る頃ではないか”と冗談を云っている頃になって始めて動き出した様な有様です。この様な状況の下で二月一日を期して全国一斉にゼネストを構えて準備する迄にエスカレートした時、その前日の一月三十一日になって、GHQが各斗争本部の一斉検査に乗り出したと云う連絡が入り、無念の涙を呑みながら蜘蛛の子を散らす様に本部を開散したのであります。後で聞けばこの時のマッカーサー元帥としては、ソ連占領軍に対する占領政策上の思惑が大いに働いた結果であると云われています。これが今でも云われている二・一ストの前後の状況であつた訳であります。

なりました。そして一年余りで統制も解けて大体各府県に引取られ、広島県も新らしく住宅課を設けて私も拾われた次第であります。

終戦後の応急簡易住宅は全国で三〇万戸を目指しながら結局四万戸余りしか出来なかつたので、GHQの命令により食糧や衣服と同じく、住宅建設にも政府が力を入れる様に鞭撻されて、漸く各府県に国の補助金による公営住宅を建てさせる事を始めた訳です。最初は木造ばかりでありましたが、二十三年度から一部RC造を加え始めて、本県でも始めて二棟のアパートを建てたのが今の百米道路に面した東観音アパートであります。

私は県庁在任中は住宅課長から建築課長、営繕課長と移り、それから今の県庁舎の新築工事現場に二年間おつてまた建築課、住宅課を歴任した訳ですが、振り返って見ると、やはりいつも住宅の問題が頭を離れた事がなかつた様に思います。戦後から三十五年経つた今日なお住宅問題で辛い思いをしている人が何十万も居ると云う事は結局は政治の問題ではありましようが、建築技術者として真剣にこの問題にとり組もうとした人が余りに少なかつたと云う点をつくづく残念に考えておりま



ます。今日程、土地の値段がよその国の十倍前後にも騰ってしまつた上では、どにも仕方がないのかも知れませんが、しかし住宅問題はやはり今敢とも建築技術者の肩に重くのしかかつて来るのではないかと今でも考えて居ります。



曾根田先生退職記念講演およびパーティーの収支報告



支	出	収	入
文	具	7,160	売り上げ $5,000 \times 184 = 920,000$
パーティー券	25,000	一	会 費 $1,500 \times 139 = 208,500$
印	刷	6,750	711,500
芳	名 帳	2,400	寄付 20,000
カ	ラ オ ケ	10,000	(会費のみ4名) 6,000
花	束	3,000	収 入 計 731,500
電	池 外	600	
記	念 品	33,400	731,500
タ	ク シ ー 代	3,450	— 91,760
			— 574,730 (会場, 飲食費)
支	出 計	91,760	残り 65,010



昭和 54 年度 決算 報告

(収入の部)

(支出の部)

繰越金	2 6 7, 4 5 0
新会員会費	3 5 4, 0 0 0
会員会費	7 8, 0 0 0
広告料	7 8 0, 0 0 0
雑収入	1 6, 7 3 8
	1, 4 9 6, 1 8 8

印刷費 (会誌 , 封筒)	3 3 4, 0 0 0
郵送費	3 4 5, 0 0 0
会議費 (幹事会)	1 2 9, 6 5 0
活動費	5 5, 1 2 0
在学生援助費	4 6, 5 1 5
コンペ費	1 9 8, 0 0 0
消耗品及び雑費	1, 6 0 0
繰越金	3 8 6, 3 0 3
	1, 4 9 6, 1 8 8

昭和 55 年度 予算 報告

(収入の部)

(支出の部)

繰越金	3 8 6, 3 0 3
新会員会費	5 7 0, 0 0 0
会員会費	3 0 0, 0 0 0
広告料	1, 0 0 0, 0 0 0
雑収入	1
	2, 2 5 6, 3 0 4

印刷費 (会誌 , 封筒)	8 0 0, 0 0 0
郵送費	5 0, 0 0 0
会議費	1 0 0, 0 0 0
活動費	1 2 0, 0 0 0
総会負担金 (5 5 3.29)	1 0 0, 0 0 0
在学生援助費	6 0, 0 0 0
コンペ費	2 4 0, 0 0 0
バイト費	8 0, 0 0 0
消耗品及び雑費	5 0, 0 0 0
予備費	1 5 6, 3 0 4
	2, 2 5 6, 3 0 4